『ブーツ・オン・ジ・アンダーグラウンド』

作・清水弥生

登場人物

上崎翔（かみざきしょう）（２５）交通事故による四肢障害がある。障害者のグループホームにて、車椅子で生活している。「日本特別平和支援隊」に選ばれ、参加。

若槻大志（わかつきたいし）（２８）先天性の身体障害・軽度の知的障害を持つ。自立歩行可能。上崎と同じグループホームで生活している。

黒岩美紀（くろいわみき）（３０）上崎らが暮らすグループホームの職員。

城ハジメ（じょうはじめ）（２８）会社員をしていたが、「日本特別平和支援隊」に選ばれ、参加。

榎木遼介（えのきりょうすけ）（２７）フリーター。「日本特別平和支援隊」に選ばれ、参加。

美濃部義人（みのべよしひと）（３３）化学の教師。「日本特別平和支援隊」に選ばれ、参加。

松岡達吉（まつおかたつよし）（５０）自衛官。「日本特別平和支援隊」教育係。

※ シーン1・通知 ※

暗闇のなか、若槻の声が聞こえてくる。

若槻の声　コウモリは、どうやって、まっくらなほらあなのなかを飛ぶのでしょうか。チョウオンハです。とおくのかべに、音をぶつけて、かえってくる音で、危険をしるのです。コウモリは、実にかしこい、生き物なのです。

重なるように、上崎の声が聞こえてくる。

上崎　感じないはずの両脚に何発も銃弾を撃ち込まれてすごい痛みで車椅子から転げ落ちた。昨日見たのはそんな夢だった。

若槻　しかもコウモリは、とてもやさしい、生き物なのです。子供のコウモリのお母さんが死んじゃうと、ほかのお母さんがその子を育てるんだって。

上崎　で、次の場面では、棺桶に入れられてた。みんな泣きながら、俺の傍に花を置いてく。俺はそれをみながら、ああ、死んだんだな俺、って思ってる。棺桶の蓋は閉められて、土に埋められる。あとはずっとものみたいにそこにいる。

不意に明るくなる。

そこは身体・知的障害者が共同生活しているグループホームの地下。

倉庫と呼ばれる場所。季節は秋の頃。

出入り口のドア付近に黒岩が立っている。彼女が蛍光灯のスイッチを押した様子。黒岩は三〇代前半の女性で、グループホームのスタッフであることを表すエプロンをつけている。姿勢がよく、立ち姿がすっとしている。

倉庫のなかは、トイレットペーパー、オムツ等の生活用品のストック、ダンボールや、使わなくなった介護用リフトやクッション等の作業器具が雑然と積み上げられている。

手動の車椅子に乗った男、上崎。スマートフォンをいじっている。

２０代半ば、両腕、両足共に、自分の意思で動かせる範囲、力が限られている。

彼の傍らにしゃがんでいる男、若槻。生き物の図鑑を読んでいる。

常に笑っているような表情で、少し舌足らずな、感情がこもっているのかいないのかちょっと聞いただけでは判断のつかない平板な喋り方をする。

黒岩　御飯できてますよ。上がってきてください。

若槻　今日、何ですか？

黒岩　唐揚げときんぴらだよ。早く来ないと、大志君のぶんまで食べちゃうよ。

若槻　唐揚げ！！
黒岩　モグラみたい。地下にずっとこもって。
若槻　ぼくたちのキチだから。
上崎　自分の部屋だと職員が勝手に簡単に入ってくるから嫌。
黒岩　悪かったですねえ。またツイッター？
上崎　俺のフォロワー結構いるんだよ。いいね！　も、もう４０個付いてる。
若槻　いいね！
黒岩　暇ね。作業所のパンフレット作り手伝う？
上崎　嫌だ。
黒岩　あ、そう。
上崎　黒岩さん、夕勤？　泊まり？
黒岩　泊まりだよ。
若槻　やった！
上崎　夜中、また散歩行こ。
若槻　いえい！
黒岩　だめよ！　この前、所長に見つかりそうになってヒヤヒヤしたでしょう。
若槻　ショチョさんの家知ってるよ。ちかいよ。
上崎　迷惑だよな。
黒岩　消灯したら外には出ません。（図鑑を指して）それ、読めた？
若槻　ショー君がふりがなつけてくれた。
黒岩　若槻くんには優しいのね。
若槻　ショー君はコウモリみたいです。やさしいです。
上崎　コウモリの唐揚げってうまいのかな。
若槻　ぎゃっ。こわい。
上崎　お前、唐揚げ好きなんでしょ。
若槻　好きです。
上崎　コウモリも好きなんでしょ。
若槻　好きです。
上崎　じゃあ、コウモリの唐揚げも好きでしょ。
若槻　……コウモリの唐揚げも好きですか。
上崎　俺に聞くなよ。
黒岩　上崎くんに郵便書留来てたよ。厚生労働省から。
上崎　何。
黒岩　障害年金のお知らせじゃないの。
上崎　開けて。

黒岩、持っていた封筒を開ける。緑色の紙を取り出す。

黒岩　……。
上崎　何？

黒岩　……。
上崎　何？
黒岩　「国の平和と独立を守るため、二年間の徴用の義務を預かる栄誉をここにお知らせ致します……。」
上崎　見せて。

黒岩、上崎に紙を握らせる。

若槻　パリパリ、ジュワジュワ♫　サクサク、パフパフ♫（からあげ応援ソングを歌っている。）
上崎　当たった。
若槻　宝くじ？
上崎　もっとでっかいくじ。
黒岩　（上崎の手から紙を奪って）特別平和支援隊選任のお知らせ……。これ、ニュースでやってたやつ？　二〇歳から三五歳までの健康な若者が裁判員制度みたいに抽選で選ばれて、参加する義務を負う、みたいな……。
若槻　ぼくも引く。何するの。
黒岩　なんか、自衛隊がアメリカとの合同訓練とか、アメリカ軍の後方支援のために忙しく活動しなくちゃいけなくなってきたから、その代わりに、別のグループを作るらしいよ。「徴兵制」で。
若槻　チョウヘイセイ？
黒岩　そういうと、戦時中のイメージと一緒にされると困るから、赤紙じゃなくて緑の紙にしたんだって。
上崎　自衛隊がやってた、災害救助とか、祭りの警備とか、そういうのを請け負うことになるみたい。
若槻　サイガイキュウジョ？
上崎　人助けだよ。
若槻　すごーい。　ショーくん、人助けなの？
上崎　二年間訓練施設で訓練しながら任務について、最後には海外研修もついてるんだ。任期中に資格も取れるし、希望者には、任期終了後に就職も斡旋してくれるらしい。
若槻　シューショクにはアッセンするの。すごーい。
上崎　寮に入って飯もただで食べられて、月二〇万円の補助金も出るらしい。
若槻　ニジュウマン円。かねもちー。
黒岩　……ねえ。これ、なんで上崎君に来たの。
上崎　抽選で、選ばれたんじゃない？　無作為で。
黒岩　無作為っていっても……、無作為過ぎない？
上崎　俺、国民だし、二五歳だし。障害持ちだけど病気持ちじゃないし。
若槻　スシは？　スシは出る？
上崎　いや、寿司はわかんないな。
黒岩　だって、箸も使えないのに。銃なんて持てないでしょ。

上崎　銃持たなくていいんじゃない？　災害救助と人道支援。
黒岩　災害救助ったって、災害起こったら救助してもらわなきゃいけないのはあなたでしょう。
上崎　訓練するんだよ。
黒岩　え、訓練って、ええ？　救助される訓練に使われるんじゃないの？
上崎　なんだかわかんないけど、選ばれたんだから、いいでしょ。返してよ。
黒岩　こんな制度ありかよと思ってたけど、今の政権が益々信用できない。
上崎　ほら、ここに書いてあるよ。（紙を見ながら）「国民の大半が、自分たちを誰かが守ってくれるのが当然、という消費者意識でいるとすれば、この国の防衛はいずれ立ち行かなくなるでしょう。この制度は、日本に本当の民主主義を確立していくための大きな一歩となることでしょう。」
黒岩　本当の民主主義？　障害者も徴兵に参加するのが？
上崎　いいじゃん。ここにいても退屈だし。二十万もらえるし。
若槻　ぼくも行く。
上崎　だめ。当たりを引かなきゃだめなの。
若槻　僕、くじ引き、まだ引いてないよ。
上崎　大志、これは選ばれた人間の使命なんだ。俺たち障害年金と、国やら都やら区やらの補助金合わせて、大体いま月十六万、そこからグループホームの家賃、生活費、引いたらちょっと貯金できるぐらいだ。
黒岩　私の給料だって変わんないわよ。若槻君は重度障害者じゃないからもっと手当は少ないわよ。
上崎　そうだろう！　作業所だって月から金まで働いて、月に一万円もらえるかもらえないかだろ。だけど、俺が支援隊に入ったら、月二〇万丸々もらえるんだ。金貯まったら中東までワールドカップ観に行けるぜ！
若槻　いえい！
上崎　しかも、パン作りとか、草取りとかみたいな、つまんない仕事じゃないんだぜ。寿司や焼肉も出るかもしれない。
若槻　ぼくも行く。ぼくも行く。
黒岩　変なことといって若槻君たきつけないでよ。
上崎　推測を言ってるだけだろ。
黒岩　推測でものを言わないでよ。だって、上崎君が行って、どうするっていうのよ。
上崎　大志、先、食堂行ってていいよ。早く行かないと、ごんちゃんがお前の唐揚げ食っちゃうぞ。
若槻　唐揚げ、あ、唐揚げ。

若槻、倉庫を去る。

上崎　黒岩さん、何なんですか。
黒岩　健康診断ではねられるとか……。
上崎　俺にどこにも行ってほしくないんですか。

黒岩　行ってほしくない、わけではない。
上崎　自分だってやめるつもりしてるんでしょ。
黒岩　え、誰から聞いたの。
上崎　今井。
黒岩　おしゃべりね、今井ちゃん。今すぐってわけじゃないわよ。代わりの人も見つかってないし。
上崎　飽きた？
黒岩　飽きたわけじゃないよ。……こういう施設ではさ、私たち職員はある価値観のなかでものを言うわけでしょ。やれ小遣いチェックしろ、だの、部屋の掃除しろ、だの、リハビリ体操しろ、だの。
上崎　「指導」してくれてますよね。
黒岩　あなたたちのために、って価値観で、アドバイスしなきゃいけないわけ。でも、私、どっか言いながら疑問に感じてる。借金まみれになろうが、ゴミ屋敷になろうが、そんなの自分の責任でしょって。障害を持った人だって、失敗する自由があっていいと思うわけ。
上崎　でも、コストがかかるからね。俺ら、借金してサラ金に追いかけられても、簡単に逃げられないからね。
黒岩　親は私たちに子供を預けてる。施設の職員は、それで給料をもらってる。だから問題が起こりそうなら未然に防ぐ。
上崎　そして僕らは、一生失敗できない。
黒岩　でも、安心は手に入る。
上崎　何、それに悶々としてやめちゃいたくなったわけ。
黒岩　まあ、別の世界も見てみたい、と思って。て言っても、選択肢そんなにないんだけどね、三〇越えてるし。
上崎　いいな。

黒岩は少し離れて上崎を見ている。

黒岩　……ねえ、触ってみようか。
上崎　うん。

黒岩、上崎のズボンのチャックをおろし、中に手を入れ、上崎の性器を優しく触る。
上崎、目を瞑って静かに息を吐く。

黒岩　この前は、もう少し固くなったのにね。
上崎　自分でもよくわからないんだ、どうしたらそうなるのか。
黒岩　今は、感じない？
上崎　でも、落ち着く。

黒岩は、上崎の下半身全体を包み込むように抱きしめる。
上崎は黒岩の頭にそっと触れてみる。
開きっぱなしのドアから、松岡が顔を出す。

松岡　あのう。

松岡は五〇代前半、背広を着た上から見ても、鍛えた身体が想像できるほど筋肉質な感じがにじみ出ている。顔付きは穏やかで、物腰の柔らかい印象を与える。
突然声をかけられたことに驚き、黒岩は反射的に上崎の股間を隠そうと、上崎のズボンのチャックをあげようとする。上崎の性器がチャックに引っかかった様子。

上崎　（涙目で）ちょっと、痛い！
黒岩　あ、ごめん！　（松岡に）トイレの介助中で。
松岡　や、これは失礼しました。ドアの外で待ちます。

松岡、ドアの外に出る。黒岩、急いで上崎のズボンを直す。

黒岩　（ドアの外に）もういいですよー。
松岡　大変失礼致しました。ドアが開いていたものですから、つい……。
黒岩　すみません。あの、この地下の倉庫って、滅多に人が入ってこないものですから、つい。
松岡　上崎さんをお尋ねしたところ、食事を準備中のスタッフの方が、多分倉庫じゃないかって教えてくださいまして。
黒岩　ここの職員の黒岩です。
松岡　ああ、どうも、（名刺を取り出しながら）自衛隊三等陸佐の松岡辰吉と申します。
黒岩　自衛隊？　（名刺を受け取る）
松岡　（上崎にも名刺を渡しながら）この度、特別平和支援隊の制度導入に伴いまして、訓練指導官に任命されました。
上崎　上崎です。見ました。送られて来たやつ。
松岡　上崎さん、初めまして。もっと早い時間に来る予定だったんですが、業務が立て込んでおり遅くなってしまって。
上崎　はあ。
松岡　（周りをじっくり観察しながら）こういう、障害のある方々が集まってお住まいになっている施設というのに初めてまいりましたが、いや、実に機能的に充実した形で作られているものですね。それぞれのお部屋も、それぞれの障害にあった形で作り変えられたりしていると聞きました。
10
黒岩　はい。あのう、上崎君にお話でしたら、私、席を外しましょうか。

松岡　いえ、職員の方もいてくださった方が。もう、そちらを（上崎の持っている緑の紙を指して）、お読みいただいているようで。
黒岩　はあ……、上崎君が選ばれるなんて、何かの間違いじゃないかって思ってたんですが……。
松岡　（勢いよく頭を下げる）すみません！
上崎・黒岩　……。
松岡　間違いだったんです！
上崎　……はあ？
松岡　本来、支援隊の候補者の名簿は、市町村の選挙管理委員会が、二〇歳から三五歳までの男女のなかからくじで選び、それを都道府県で集約したなかから更にくじで選び、更にそれを西日本東日本ごとに集約した中からくじで選び、最終的に一〇〇〇人余りを候補者に上げて通知を出しています。その最初のくじをする段階で、障害を持った方は除外するはずだったのですが、手違いによって上崎さんが入ってしまったのです。
黒岩　そんなことだろうと思った。
松岡　選挙管理委員会が雇ったバイトが、パソコン上での選別を間違えたようなんですが、どこもミスを隠蔽しようとして、責任の所在がいまだにはっきりしていません。これも公務員の非正規雇用化の弊害の一つです。
黒岩　あら……。
松岡　今、迅速にその原因を調査しています。ともかく、緊急会議の結果、通知が誤報であることを、公（おおやけ）にならないうちに、速やかに上崎さんに告げにいき、通知を回収するという役目を私が受け持つことになったのです。
黒岩　そうだったんですか……。
松岡　上崎さんには大変ご迷惑をお掛け致しました。また、改めて謝罪の文書をお届け致しますが、取り急ぎ、私共にその緑紙を返していただくということで、今回の件はお忘れください。お騒がせして本当に申し訳ありません。
黒岩　なんかおかしいとは思ったんですよ……。上崎君？

上崎、車椅子を動かし、松岡に背を向ける。

黒岩　どうしたの？
松岡　上崎さん。
上崎　俺、返さないから。
松岡　え？
上崎　どうして俺は除外されるんですか。
黒岩　どうしてって……。
上崎　ここに書いてありましたよね、すべての国民に、国を守る義務があるんだって。その、国民に、僕も入っているはずでしょう。僕にもその義務があるはずです。義務があるなら権利もあるはずだ。
黒岩　ちょっと、義務とか権利とかどうでもいいわよ。

上崎　僕が国民じゃないって言うのか。
黒岩　あなたがわざわざ行くことないでしょう。あなたが行くんなら、介助のために何人かヘルパーもついて行かなきゃいけないでしょう。
上崎　いいでしょ。ヘルパー付きの参加で何が悪いの。
黒岩　そんな、どうすんのよ。銃を撃つときはあなたの代わりにヘルパーが撃つわけ？介助できることとできないことがあるでしょ。
上崎　ヘルパーの人が銃撃つ訓練できるし、いざというときのためにいいじゃない。
黒岩　ヘルパーが銃を撃ついざというときってなによ！
上崎　これからは団塊の世代が介護を受ける時代に入っていく。支援隊の若者だって介護のスキルを身につけて無駄はないはずだ。
黒岩　間違いだったって言ってらっしゃるんだから、素直に返せばいいじゃない。

上崎、通知の緑紙を口にくわえ、噛んでいる。

黒岩　あっ！
松岡　噛んでる！
黒岩　噛む力だけは強いんですよ。
松岡　上崎さん、お気持ちはわかりました。正直、そこまで上崎さんが国を守りたい、支援隊に参加したいという、その、愛国心の強い方だとは想定していませんでしたので、軽々しく通知を返せと言ってしまい、失礼致しました。しかし、あなた、先ほどのご様子からしても、ご自分で用を足すことができないんですよね。
上崎　……ええ。
松岡　食事は？
上崎　介助が必要です。
松岡　着替えは？
上崎　介助が必要です。事故で頚椎をやられて、両腕両足位が麻痺していますので。
松岡　つまり、何をやるにも全般的に介護が必要ということですね。
上崎　口は動きます。
松岡　わかります。日中は何をされてるんですか。上崎　ホームに併設された作業所に通っています。
黒岩　紙すきの作業や、印刷、封入の作業を区役所から発注受けてやっています。
松岡　うーん、上崎さん、この制度は今年度から試験的に導入された制度です。あなたを迎え入れる準備をしている余裕が、こちらにはないんです。
上崎　余裕があるとか、ないとかじゃなくて、権利だと思うんですよ。憲法でいうと、基本的人権の侵害です。まだ改正されてませんからね。
黒岩　そもそも徴用を義務づけるほうが、基本的人権の侵害じゃないの？
松岡　黒岩さん、それは違います。国民の合意を得て、この制度はできあがったんですから。
黒岩　私も国民ですけど、合意した覚えありません。選ばれて拒否したら懲役五年だって聞いて、選ばれないように心から祈りました。

松岡　選挙で選ばれた議員が話し合った決定事項は、民意という解釈でいいですね。二年間の訓練、公役の義務なんて、喜びいさんで行く人はなかなかいないでしょう。でもね、じゃあ、誰がこの国を守るんです？　誰かが血を流す覚悟が必要なんです。
上崎　僕も血を流す覚悟です。
松岡　あなたはいいです。
上崎　だからなんでよ。権利は？
松岡　権利というのは、公共の福祉に反しない範囲で認められるものです。あなたが権利を濫用することは、公共の利益に反している。
上崎　ぶっちゃけ、迷惑だ、と。
松岡　あなたが参加する。そうすると、あなたに事故がないように、我々は神経をすり減らす。あなたはそれで満足かもしれない。しかし、我々にメリットが何もない。
上崎　メリットですか。
松岡　何年か経てば、障害を持った人たちにも何かできることを、と考えられるかもしれない。しかし、今は無理です。
上崎　じゃあ、訴えます。訴訟で。
松岡　冗談じゃない。
上崎　冗談じゃありませんよ。あなたたちの考え方は、第二次世界大戦中に障害者を大量虐殺したナチスドイツとおんなじなんです。すべて人間をメリット、デメリットで考える思考しかないんです。僕を排除することは、役に立たない人間は殺してしまえ、というナチスの思想に発展していくんです。
松岡　我々は、あなたの身の安全、命を大切に考えて判断しているんですよ。それをナチス呼ばわりするなんて……。
上崎　なぜ僕の身の安全だけ考えるんですか。それを差別というんじゃないんですか。
松岡　まいったな……。
上崎　いいですよ。訴訟を起こしますから。民主主義の防衛だなんて、名ばかりだって、世間が知る事になるでしょうから。ついでに、しょっぱなから選定のシステムにトラブルがあったって聞いたら、みんな不信に陥るでしょうね。
黒岩　馬鹿なことばかり言ってないで、とっとと通知を返したほうがいいんじゃない？
松岡　上崎さん！

上崎、通知を噛んでいる。
溶暗。

※　シーン２・出征　※

若槻が一人、話している。

若槻　僕とショーくんが、はじめて会ったのは、二年まえです。二年まえ、ショーくんは、
グループホームにひっこしてきました。……ぼくはちょっとこわくて話しませんでした。とつぜん、切れたりするからです。ショーくんがきてから、じけんがありました。ショーくんが、ごはんを食べなくなったのです。ビョーキではなく、コーギのためだったのです。ぼくたちがごはんを食べる十五分いじょうまえに、ヘルパーさんたちが、おみそしるをおわんによそるのがいやだというのです。ぼくはびっくりしました。ヘルパーさんたちはいそがしいなか、ぼくたちのためにやってくれているのだから、そんなことをいってはいけないとおもっていたからです。ショーくんは、おこってふつかもごはんをたべませんでした。ぼくはしんぱいになって、うまいぼうを部屋にもっていきました。ショーくんはぼくを見て、ありがとう、とわらいました。そして、わかつきくんも、つめたいみそしるなんて、いやでしょ、といいました。ぼくはうなずきました。そのつぎの日から、みそしるがあたたかくなったのです。ショーくんは、コーギのどりょくがみのり、しえんたいにはいることができました。僕はびっくりしませんでした。ショーくんは、なんでもやるとおもったからです。

松岡、美濃部、城、榎木、上崎が出てくる。

松岡　国旗掲揚。敬礼！

美濃部、日の丸の旗を掲げる。
君が代が流れ、一同歌いだす。
途中で、大きく地面が揺れる。若槻、バランスを崩してしりもちをつく。
支援隊メンバーは退却する。
黒岩が入ってくる。

若槻　そのあと、ショーエツチュージシンがダイ起こりました。
黒岩　中越大地震ね。
若槻　こわかったけど、まえの、東日本だいしんさいのほうがこわかったし、なれました。しえんたいは大かつやくしました。とくにショーくんは、くるまいすでひさいちにむかい、話しを聞いているすがたがテレビによくうつりました。

この台詞で、若槻の頭の中で繰り広げられた世界は終わり、場所はシーン１と同じ、グループホームの倉庫。季節は夏の頃、真昼。シーン１よりおよそ八ヶ月後、支援隊の訓練が始まって、四ヶ月の頃である。
リボンのついた紙袋が幾つか置かれている。

黒岩　いいと思うけど、今日はショーくんが、名誉隊員に選ばれたお祝いの会だからね、

おめでとうございます、ってつけたほうがいいよ。
若槻　わかりました。おめでとうございます。
黒岩　若槻君、よく書いたね。
若槻　黒岩さん。ショーくんかっこいいね。
黒岩　そうね。ヒーローみたいになったわね。
若槻　ヒーロー。ファンタジスタ。
黒岩　ワールドカップ、行けるかな。
若槻　黒岩さん、うれしい。
黒岩　ええ？　……まあ、久しぶりだからね。四ヶ月ぶり。
若槻　よんかげつ。
黒岩　……若槻くん、それごんちゃんのTシャツじゃない？　勝手にとっちゃだめよ、人の洗濯物。
若槻　間違えた。
黒岩　後で謝って返しなさい。
若槻　ぼく、暗いとこ一人で動けるようになりました。くんれんしました。戦争にも行ける？
黒岩　戦争なんて日本はしてないです。……ここで暮らしていくの、嫌？
若槻　いやじゃないです。
黒岩　作業所で働くの、嫌？
若槻　いやじゃないです。
黒岩　じゃあ、どうして支援隊に行きたいの？　厳しい訓練をしなくちゃいけないのよ。
若槻　さぎょうしょもくんれんだといわれました。
黒岩　……。
若槻　死ぬまでくんれんが続くなら、べつのくんれんがいいです。
黒岩　……若槻君、お引越しのくんれん、する？
若槻　おひっこしのくんれん。
黒岩　国の福祉のお金が足りなくなったの。なくなっちゃう予定の施設に住んでる人たちが、ここに引っ越して来たいって言ってるの。若槻君は動けるから、遠くの施設でも住めるよね。
若槻　すめません。
黒岩　どうして。
若槻　ここ、ぼくたちのキチ、あるから。

ドアの外から複数の人間の足音がする。
松岡を先頭に、車椅子に載った上崎を押した美濃部、城、榎木が入ってくる。
皆、お揃いのユニフォームに、明るい色のTシャツ、ベレー帽を被っている。
美濃部は三〇代前半の、爽やかで誠実そうな印象を与える男性。城は二〇代後半の女性、常に泣き顔で不安を抱えている風に見える。榎木はどことなく

日陰に生えたもやしのような印象を受ける二〇代半ばの男性。

黒岩　あ、松岡さん、ご無沙汰しており……。

松岡　全体、止まれ！　右向け、右！

美濃部、城、榎木は上崎を真ん中にしてざっと横一列に並ぶ。

松岡　脱帽！　敬礼！

美濃部、城、榎木は一斉に手を額の前に動かして敬礼をする。城は手に持ったバックを置くのに少しもたもたしている。

松岡　自己紹介！

美濃部、他の三人より一歩前に出る。

美濃部　上崎君と同じ、特別平和支援隊第二四班、美濃部義人であります。今回、上崎君の栄誉隊員賞受賞の祝賀会に班から代表してお招きいただき、誠に光栄です。

美濃部が一歩戻ると同時に城が一歩前に出る。

城　同じく特別平和支援隊第二四班、城ハジメです。あの、上崎くんとは、あの、同じ班で活動させていただいただ、いて、あの……。

松岡　あの、はいらない、次！

城、一歩戻ると同時に榎木が一歩前に出る。

榎木　特別平和支援隊第二四班、榎木遼介……、えと、上崎の世話をして、させて……（考え込んでいる）。

松岡　アウト！　腕立て伏せ二〇回！

美濃部・城・榎木　はい！

三人、一斉に腕立て伏せを始める。

黒岩、若槻、何がなんだかわからずボーっと見ている。

松岡　着帽！　基本挨拶の一部をお見せしました。実際の訓練だと、腕立て伏せ五〇回はやりますけどね。

黒岩　なんで間違えた人だけじゃなくてみんなやるんですか。

松岡　連帯責任の精神を身につけさせるためです。自衛隊の基礎訓練をモデルにしています。

黒岩　はあ……。二四班って、全部で班はいくつあるんですか。

松岡　八〇班です。一つの班に付きおよそ一〇人。上崎君の班は美濃部が班長として、介

護スケジュールなどもまとめています。
美濃部　はっ。（敬礼）
上崎　お世話になっております！
黒岩　それはどうも。祝賀会は上の食堂で行う予定なんですよ。
上崎　上の食堂に先に参りましたが、準備が忙しそうで邪魔してはならないと思い、先にこちらへ挨拶に参りました！
黒岩　そうですか……。
若槻　（上崎に）ショーくん、いっぱいプレゼントが来ております。
上崎　（プレゼントの山を見て）自分にですか？

若槻、一つの袋をとる。

上崎　開けていただけますか？

若槻は袋のなかから紙の筒を取り出す。
上崎をモデルにしたらしい車椅子の少年のイラストが描かれている。
「Peace Supporting Organization」と下に描かれている。

黒岩　お手紙も入ってる。「自分の身の回りのことをするのも大変な上崎くんが、一生懸命人のために動いているのを見て、感動しました。応援しています。」
美濃部　上崎君は被災地でもモテモテでした。
松岡　健気な支援活動は被災地の人たちを勇気づけました。毎日車椅子を滑走させて瓦礫を拾った。
城　（カバンから取り出す）マジックハンドです！　上崎君のアイテムです。
松岡　避難所の体育館に向かい避難物資を配る手伝いをした。一人暮らしのお年寄りたちの安否確認に奔走した。
美濃部　いまや上崎君は私たちの隊のシンボルです。城さん。
城　はい！　上崎君は、とっても、とっても頑張ったんです。
美濃部　そうじゃなくて、あれ。
城　あ、はい！

城、カバンからビニールに入ったパンを取り出す。

美濃部　パンの真ん中に上崎君のマークが入ったパン。支援隊パンです。
城　中はクリームとあんこの二種類があります。
美濃部　支援隊バッチ。
城　一つ三五〇円、三つで一〇〇〇円です。バリエーションが7種類あります。
美濃部　みな売れ行き好評で、再発注しています。
上崎　光栄であります。
松岡　支援隊には広告会社に勤めていた者もおります。こういうのを発案して売り込むア

イデアも隊員から自主的に出たものを採用したんです。
黒岩　へええ。
松岡　隊員には様々なメンバーがおります。美濃部は教師ですし。
美濃部　中学で化学を教えています。
松岡　城はデパートで勤めていました。
城　あの、化粧品売り場で。
松岡　榎木はゲームセンター。
榎木　まあ、フリーターです。
松岡　いろんな背景の者が一斉に集まり、みな平等に訓練しています。中越大地震では、人名救助、物資救援、瓦礫掃除、慰問、かなりの範囲で迅速に支援をすることができました。
黒岩　ええ。うちのグループホームでもすごく盛り上がってます。すみません、申し遅れまして。このホームの職員の黒岩です。若槻君、挨拶しましょうか。
若槻　若槻大志です。
黒岩　彼も上崎君と同じく、入居者です。松岡さん、所長がご挨拶したいと申しておりましたので、一緒に来ていただけますか？　ご案内致します。
松岡　はい。
黒岩　皆さんは食堂が準備出来次第、呼びに参りますのでお待ちいただけますか？
美濃部・城・榎木　はっ。

黒岩、松岡、出て行く。

美濃部　ここ、なんなの。お前の部屋じゃないんでしょ。
上崎　倉庫です。俺の部屋は二階です。
美濃部　ほこりかぶってるし、ネズミ出そう。
若槻　あのね、出ます。
美濃部　うわっ。勘弁して！
榎木　部屋の家賃っていくらぐらいなの。
上崎　七万。
城　都内だからね。
榎木　それ、お前どうやって払ってたの？
上崎　障害年金とか、重度障害者手当とか、そういうのとかで。
榎木　どのぐらい？
上崎　合わせたら年間二〇〇万ぐらいかな。
榎木　へええ、いい暮らししてるねー。
城　あんな大勢集まって、祝ってくれるなんて。入居してる人たち、みんな仲いいんだね。
上崎　仲いいってわけじゃないんですけど、滅多にないことなんで。
美濃部　俺なんて、この前初めて外泊申請して九州まで帰ったけど、嫁に散々泣き言、言われて参ったよ。

城　奥さん、寂しいんじゃないですか。
美濃部　寂しいというか、ストレスだね。母親と子どもの面倒一人で見てるから。
榎木　家族持ち、つらそう。
若槻　くんれんは、つらいですか。
榎木　んー、つらいときもありますけどね。楽しいのもありますよ。射撃訓練とか。
若槻　シャゲキ。
榎木　銃持って撃つんです。ワクワクしますよ。
若槻　おお。
榎木　小銃をもらったら、まず部品をバラバラに分解して組立てる練習を何度もするんですよ。そのうち真っ暗ななかでも組み立てられるようになるんです。
若槻　すごーい！
美濃部　体力的には、匍匐前進とか結構きついんですよ。僕はもう、年なんで。
城　訓練は厳しいけど、充実してます。
若槻　ジュージツ。
上崎　しあわせってことかな。
城　私、前のデパートの仕事より、いまの生活のほうが好きなんです。数字に追いかけられるより、人のためにやってるって実感できるから。
美濃部　え、城さん、やめたの？　支援隊休とってないの？
榎木　そんなの取れるの、公務員か大手企業だけですよ。
美濃部　首切られたの？
城　はい、……形は自主退職ってことになってます。
美濃部　ひどいな、会社に抗議した？
城　いえ、いいんですよ。そういうの、得意じゃないし。
榎木　そういうもんですよ、俺もバイトやめて、アパートも引き払いましたし。いいよな、上崎は部屋も残されてるし。
若槻　かわいそう。
榎木　いいんですよ、支援隊での生活のほうが、潤ってますから。
城　ここがお気に入りの場所なの？
上崎　地下が好きなんですよ。
若槻　ボクたちのキチなんです。

黒岩、入ってくる。

黒岩　お待たせしてます、食堂、準備整ったので、こちらどうぞ。
美濃部　はっ。恐縮です。
城　ありがとうございます。

美濃部、城、榎木、黒岩、部屋を出ようとする。

若槻　ショー君の空気入れます。

黒岩　抜けてる？　タイヤの。
上崎　ああ……。
黒岩　先行ってるね。

黒岩、美濃部、城、榎木が部屋を出て行く。

若槻　おめでとうございます。
上崎　ありがとうございます。
若槻　ファンタジスタ。
上崎　恥ずかしいからやめろよ。

上崎、若槻の手を借りて、車椅子から降りて、段ボールの上に座る。柱を背もたれにして寄りかかる。
若槻、上崎の車椅子のタイヤの空気を、慣れた手つきで入れ始める。

上崎　ここは変わらないね。ひんやりしてて、気持ちいい。
若槻　ぼく、ショーくんのブルベリ、水やってるよ。
上崎　頼むよ、任期終わるまで帰れないし。
若槻　帰れないの？　いつ？
上崎　一年と、あと半分。（タイヤの表面を押して空気圧を見る）大丈夫でしょ。
若槻　（空気入れのホースをタイヤから抜きながら）空気パンパンにしたタイヤがプシューって息吐くの、ぼく、好き。
上崎　（自分の車椅子の後ろにかかっている袋をさして）ねえ、後ろのやつ、あげる。おみやげ。

若槻、袋を開ける。玩具の小銃である。

若槻　おお。
上崎　好きでしょ。
若槻　好き。バラバラにしてくっつける、れんしゅうする？
上崎　いや、しなくていい。たぶん元に戻せない。
若槻　ありがとう。
上崎　撃たれる前に撃たなきゃならない。そうしなきゃ、世間では生き残れないんだぞ。大志も自分の身は自分で守らなきゃ。
若槻　ショーくんやさしいの、ぼく、好き。
上崎　あんまり、好き好きっていうな。そういうのを好きの安売りって言うの。
若槻　スキノヤスウリ？
上崎　好きのバーゲンセールってこと。「好き」っていうのは、本当に、自分が大好きだって思うときにだけ、こそっと囁くものなの。
若槻　ササヤクって何？

上崎　小っちゃい声で言うの。若槻　つぶやき？
上崎　つぶやきとは違うよ、つぶやきはひとり言。
若槻　ツイッタ。
上崎　よく知ってるな、お前。
若槻　ササヤクは一人じゃないの。
上崎　囁くは、相手の耳元で、そっと言うの。……お前、黒岩さんのこと好き？
若槻　好き。
上崎　耳貸して。（耳を寄せてきた若槻に囁くように）「好きです」
若槻　唐揚げも好きだけど。
上崎　唐揚げに囁いても仕方ねえだろ。黒岩さんと唐揚げ、どっちのほうが好きなんだよ。

若槻、考えている。

上崎　唐揚げと一緒にされちゃ、黒岩さん怒るぞ。チューしたいのはどっちだ。
若槻　（少し考えて）黒岩さん。
上崎　だろ、それが好きってことなんだ。
若槻　食べたいのは唐揚げ。
上崎　まあ、それはそうだろう。
若槻　黒岩さん、チューしてくれるかな。
上崎　……頼んでみろよ。恋が成就するかもよ。
若槻　恋がジョウジュするってどういう感じ？
上崎　……知らない。気持ちいいんじゃない。車椅子に戻して。

若槻、上崎を抱えて車椅子に戻す。

上崎　大志、……俺、黒岩さんをデートに誘ってもいい？
若槻　いいよ。
上崎　よし。
若槻　ぼくも行っていい？
上崎　えっ。
若槻　だめなの。
上崎　デートは普通二人だよ。お前は遠慮しろよ。
若槻　わかった。くんれんならいい？
上崎　何？
若槻　しえんたい。くんれん。
上崎　だめだよ。
若槻　どうして。
上崎　大志、被災地っていうのは、行かなきゃわからない大変なことがたくさんあるんだ。建物は倒れて大切なものも地面に埋まってる。津波の被害を受けた海辺なんか、

死んだ魚の臭いでプンプンしてる。そういうところでゴミを拾ったり、掃除したり、体育館に逃げた人たちを励ましたりしなきゃいけないんだ。

若槻　ふうん。

上崎　難しい仕事を支援隊はやんなきゃなんないんだよ。お前には無理だよ。

若槻　それで、ショー君は何したの。

上崎　何って……。

若槻　ショー君は何したの。

上崎　……。

若槻　ぼく、じゅううてるよ。

上崎　銃を撃ててもだめなんだよ、ちゃんと人の言うことわかって行動しないとやってけないんだよ。お前それ、できんの？　若槻　できるよ。できる。

上崎　世の中そんなに甘くない、この意味わかる？

若槻　わかんない。

上崎　理解できないでしょ。それじゃ組織のなかに入れないの。一生このホームのなか！

若槻　ウー、クー。

若槻、発作的に泣くのをこらえるように、自分の頭をポカポカ殴っている。
上崎、はっとするが、黙って目をそらしている。
黒岩が入ってくる。

黒岩　みんな待ってるよ。……どうしたの、若槻君。

黒岩、若槻を抱きしめる。

黒岩　大丈夫よ、なんにも怖いことはないのよ。

若槻、次第に落ち着いていく。

黒岩　久しぶりにあったのに、もう喧嘩？

上崎　喧嘩じゃない、大志が弱すぎなんだよ。

黒岩　いろんな感情がいっぱいになって、処理しきれなくなったのよ。上崎君が帰ってきて、嬉しいとか、寂しいとか。そういうこと、私たちにだってあるでしょう。

上崎　黒岩さん、まるで大志の母親だね。

黒岩　……母親を求められれば母親になるし、友達を求められれば友達になるときだってある。そういう仕事だと思ってる。

上崎　そうだよね、仕事だから、やめようと思えばいつでもやめられる。

黒岩　何よ、その言い方。木下さんが妊娠したり、戸川さんが腰痛めたりして人が足りなくて大変だったのよ。。

上崎　逃げようと思えば、すぐ逃げられる。黒岩さんはずるい。

黒岩　……。

若槻　ぼくが行かないでって言ったんだよ。
上崎　……いつまでもそうやって誰かに保護されてろ。
若槻　なんでショーくんおこるの。
上崎　黒岩さんはずるいよ。支援隊に行く前の夜のこと、なかったことにしたいの？
黒岩　……。
上崎　あれは仕事だったの？　奉仕？　同情？
黒岩　どれでもない。最高にうれしかった思い出。
上崎　……。
黒岩　自分こそずるいでしょ。勝手に二年間もいなくなるんだから。
若槻　そうだ！
上崎　何かするたびに人に面倒かけてるのぐらい知ってる。でも俺に失敗する権利はないの？
黒岩　……。
上崎　二年間がんばったら、結構お金も貯まる。……そしたら、一緒に旅行、行こう。また、あの時みたいにできるかもしれない。
黒岩　……。
上崎　遠くじゃなくてもいいんだ。
若槻　ぼくも行く。
上崎　お前……。
若槻　黒岩さん。
黒岩　何。
若槻　（黒岩の耳元で囁くように）好きです。
上崎　今言うなよ！
若槻　チューしてもいいよ。
黒岩　しませんよ。
若槻　どうして。
黒岩　……大人はチューしちゃいけないんです。
若槻　ちぇっ。
上崎　黒岩さん、俺の話は……。
黒岩　フフ、今日はご馳走だよ。ポテトフライと唐揚げもあったよ。
若槻　ぼくと一緒に唐揚げつくりませんか。
黒岩　一緒に？
若槻　はい。
黒岩　今度、やってみようか。
若槻　やってみたいです。

黒岩、微笑んでうなずく。
プレゼントの山を手にする。

黒岩　これ、上に持っていくね。

若槻　（上崎に）ショー君、リボン。
上崎　いいよ。
若槻、一つの袋のリボンを取る。
なかに熊のぬいぐるみが入っているのを取り出す。
若槻　クマだよ。
若槻、ぬいぐるみを渡す。上崎、クマをなでている。
黒岩　それ、お尻になんか書いてるよ、メッセージ。
上崎　何て？
黒岩　（熊のお尻を見て）「KILL　YOU」……。
上崎　……。
若槻　かわいいねー。
溶暗。

※　シーン３・訓練　※

城が、支援隊のプロモーションビデオの案内役を務めている。
城　こんにちは！　皆さんが興味津々な私たち支援隊員の生活。実際どのような訓練が行われているのでしょうか？　私たち隊員が、少しご紹介したいと思います。
ラッパが鳴る。
城　午前６時、起床の合図です。
美濃部が登場する。
美濃部　起きるとすぐにマットレスと毛布を整理し、訓練服を着て、二段ベッドの６人部屋を飛び出し練隊場まで走ります。
美濃部、榎木、城が練隊場へ登場する。
松岡　（怒鳴って）さっさと走れ、家じゃねえんだぞ、ノロノロすんな。

城　朝の点呼です。
美濃部　（声を張り上げて）二四班総員一〇名、人員整備異常なし。
榎木　体操の後、駆け足で食堂に飛び込みます。食べ終わったらトイレと部屋掃除。七時から自主訓練が始まります。
松岡　整列！　回れ右！　前へ進め！　止まれ！

松岡の号令に合わせて、榎木、城、美濃部が列を組んで動く。

松岡　国旗掲揚。敬礼！

一同、一斉に敬礼する。

城　ようやく午前の授業の始まりです。座学は安全保障教育、精神教育、防衛に関する授業など、様々なカリキュラムが組まれています。

上崎も現れて参加する。
榎木、城、美濃部が椅子に座って授業を聞いている。
松岡が講義をしている。

松岡　二〇〇四年に陸上自衛隊がイラクに派遣されたことは大きな意味を持つ。紛争の終結後に国連がお膳立てするＰＫＯと、全部日本の自己責任で行うイラクの「戦時派遣」では、わけが違う。だから新しい法律が必要だった。

榎木、ウトウトと眠っている。

松岡　榎木、その新しい法律の名前は。

榎木、眠りこけていて答えない。

松岡　榎木！
榎木　（びくっと起き上がって）ナイトパックで６時間１０００円のお得なコースになっております。
松岡　なにを言っとる！　美濃部！
美濃部　……テロ特措法？
松岡　当たり。このときの陸上自衛隊の派遣は、ブーツ・オン・ザ・グラウンド、と呼ばれている。結果的に、日本は国際社会において、「日本のプレゼンス」を示すことに成功した。近々、集団的自衛権を正式に認める決定も政府から出されるだろう。自衛隊は今後益々、世界の紛争解決、人道支援のために働くことになる。支援隊は自衛隊の国内での業務を助け、いずれその一翼を担うよう、期待されている。気を引き締めろ！

チャイムの音。

城　午後からは基本教練です。基本教練はランニング、筋トレ、跳び箱など。慣れてきたころ、小銃が手渡されます。

松岡　荷なえ筒！　立て筒！　（号令に合わせて、美濃部、城、榎木は「荷なえ筒」「立て筒」のポーズを取る）

城　射撃訓練がはじまります。

上崎は訓練を見ている。

美濃部　実弾はもったいないのでほとんど使いません。

松岡　前方堆土の位置まで、早駆け用意！

美濃部、城、榎木、早駆けの姿勢を取る。

美濃部　僕たちは堆土と呼ばれる土まんじゅうから土まんじゅうへ、猛ダッシュして、敵陣へと向かいます。

松岡　前へ！　（美濃部、城、榎木は復唱、前へ！）　第一パーン。前方敵３００、前の兵、撃て！

榎木たち、バーン、バーン、と口にしながら撃つ真似。
敵の射撃音がスピーカーから流れてくる。
機関銃の射撃音が流れる中、榎木たちはバーン、バーンと口にしながら、堆土から堆土へ素早く移動する。

美濃部　敵の本丸に近づくと、地面を這いずる「匍匐」で、進んでいきます。

松岡　匍匐前進第二歩！（復唱）第三歩！（復唱）第四歩！（復唱）

榎木、美濃部、城、ゼイゼイ言いながら匍匐し、「突撃発起位置」にたどり着く。

松岡　突撃、準備！　（三人、「第三歩」の姿勢になる）

美濃部　突撃準備、よし！

美濃部の掛け声で、美濃部、榎木、城は地べたに伏せ、松岡の号令を待つ。
緊迫した空気が流れる。

松岡　ドッカーン！　突撃、進め！

美濃部、榎木、城、一斉に立ち上がり、銃を構え、ババババッと口鉄砲を開

始する。所定の位置まで到達すると、自身の銃身の先っぽに銃剣を取り付ける。

松岡　突っ込め！

美濃部、榎木、城は右手を銃床の根本に持ち替え、「ヤーッ」と狂ったように「かかし」のある敵陣に突進していく。

榎木　僕たちの最終目標は「かかし」です。これを渾身の力を振り絞って「ヤアッ」と突き刺すのです。

松岡　（美濃部の腰が及び腰なのを見て）そんなへっぴり腰で人が殺せるか！　本物の人間は簡単には刺せない。ぐいっと腰を入れて、えぐるようにしなきゃ効果ないぞ、抜くときもおもいっきり力入れなきゃ抜けない。（城が倒れるのを見て）立て、立つんだ城！　異常ないか。

美濃部・城・榎木　なし！

松岡　はい、状況終了。

美濃部、城、榎木、ばったり倒れこむ。

上崎　僕はコンピューター教育を受け、トイレットペーパーなどの支援隊内で使う備品の発注や、ホームページ作成、会計業務を受け持っています。

城　このように、支援隊では障害のある隊員も、できることをがんばっています。

松岡　はい、撮影終了。

城　お疲れ様でした！

松岡　休憩後にタコツボでの防御をやる。

城・美濃部・榎木　はい。

松岡　城、お前、腕っ節強くなったな。

城　はい！　ありがとうございます！

松岡　休日にも自主トレしてた成果が出たな。この調子でがんばれよ。

城　はい！

松岡　榎木、城を見習え。

美濃部、榎木は水飲み場に去る。

城　上崎君、事務局戻ろうか。

去ろうとする松岡に上崎が声を掛ける。

上崎　松岡さん。

松岡　なんだ。

上崎　自分も、訓練に参加させていただけませんか？
松岡　……お前は、お前の訓練をやっているだろう。
上崎　戦闘訓練です。松岡　……何？
上崎　参加したいんです。
松岡　バカ者、できるわけないだろ。
上崎　僕にでも使える武器があります。城さん、あれ、くれる？
城　あ、うん。

城、上崎の車椅子の後ろの袋から、手榴弾を取り出して上崎に渡す。

上崎　手のリハビリを繰り返し続けた結果、この安全ピンを抜く作業が素早くできるようになりました。

上崎、素早く手榴弾の安全ピンを抜く。そして手榴弾をできるかぎり遠くへ転がそうとする。上崎の投げる力の限界があり、手榴弾は上崎から1メートルのところで止まる。

松岡　……もしここで爆発したら、お前、自爆するじゃないか。
上崎　いいんです、敵をやっつけられるなら。

松岡、上崎の頬をはたく。

城　上崎君！
松岡　今、俺はずいぶん手加減した。ほかの隊員なら容赦はしない。常に、俺はお前を丁重に扱ってきた。
上崎　自分は、それを望んでいません。
松岡　お前が望もうがなんだろうが、関係ない。何かあったときに責められるのはこっちだからな。圧倒的に力の弱い者は保護されなければならない。現実的に、人を撃つ、撃たれるの世界に行ったら、お前は人を撃てないだろう。
上崎　……ええ。
松岡　自分の身も守れないような人間が、人の平和をどうやって守る？　足でまといだ。
上崎　……。
松岡　この一年で、お前をいろんな現場に連れて行った。
上崎　感謝しております。
松岡　バリアフリーになってる現場なんて一つもなかったはずだ。ほかの隊員たちが必死になってお前の車椅子を押したり持ち上げたりして進んできた。批判的な意見もあったが、俺はそれも一つの支援隊のあり方だと思ってやってきた。お前はずいぶんと特権を与えられてきただろう。これ以上何を求める。
上崎　僕に与えられていたのは、特権ですか。
松岡　何？

上崎　僕は他のメンバーと一緒に参加することを求めただけです。だって戦地では、殺す殺されるの権利が、平等に与えられているわけでしょう。
松岡　……。

松岡、笛を吹く。

美濃部　集合！

美濃部、榎木、城、上崎が揃う。

松岡　今からタコツボ掘りの訓練を行う。自分がすっぽり隠れられるような穴を掘れ。そこで数時間待機！　このシェルターのなかで身をかがめていれば、砲弾が穴を直撃しないかぎり、被害は受けない。この防御法は、歩兵の基本中の基本だ。美濃部、城は上崎も入れる三人用の穴を掘れ。
美濃部・城　えー！
松岡　怪我人を抱えているという設定の訓練だ。状況、開始！

時間が経過し、夜。
鳥の鳴き声。
榎木は一人用の穴、美濃部、城、上崎は三人用の穴に入っている。
美濃部、城、上崎はぎゅうぎゅうと寄り添っている。上崎には上崎用の椅子が置かれ、そこに座っている。それぞれのリュックサック、懐中電灯、スプレータイプのアースジェットを置いている。榎木は隣の一人用の穴にはいっている。

美濃部　上崎、お前二度と参加したいなんていうんじゃねえぞ。こっちがとばっちりくらうんだからな。
上崎　すみませんでした。
城　星、きれい。
美濃部　（虫を見つけて）うわ、また虫だ。

美濃部、アースジェットをかける。

城　（咳をしながら）私、そのスプレーに弱いんです。むやみにかけないでください。
美濃部　ごめん、ごめん。

榎木が隣の穴から叫ぶ。

榎木　美濃部さん、こっちにもスプレー貸してもらえますか。おいてきちゃったみたい。
美濃部　しょうがないなあ。また返してよ。

美濃部、立ち上がって、スプレーを榎木の穴に放り投げる。

城　もっと広めに掘ればよかったですよね。そしたらゆったりできたのに。
美濃部　まあ、まさか今日泊まりにはならないでしょ。
上崎　穴のなかって、落ち着きますよね。
美濃部　変な奴だな、お前って。戦闘訓練なんて、俺だったら喜んで免除されるけどな。
教え子にこんな姿絶対見られたくないよ。
城　こんな訓練してても、自分が人殺すなんて想像できない。
美濃部　集団的自衛権が認められたら、そんなこと言ってられないよ。自衛隊がどんどん米軍に駆り出されたら、俺たちＰＫＯぐらい行かされるんじゃない？
城　でも本来、自衛隊の国内の業務が、支援隊の受け持ちですよね。
美濃部　そんなの建前だよ。集団的自衛権の行使を見越して、支援隊が設立されたんだから。災害救助と復興支援だけなら、こんな訓練必要ないでしょ。
上崎　会議で何か発表されたんですか？
美濃部　いや、特には。しばらくは放射能除染作業と原発の掃除、オリンピックのための施設整備が続く予定になってる。
城　また除染行くんですか？　美濃部　来月から、また一ヶ月継続。
城　（ため息）
上崎　海外研修は。
美濃部　中東に決まったみたいだ。……お前、志願してるの？
上崎　志願はしました。
美濃部　そうか……。
上崎　俺、いけないんですか？
美濃部　いや、知らない。
上崎　俺、外されてるんですか？
美濃部　知らないって。
上崎　行けないんだ……。
美濃部　集団的自衛権、このままいくとほぼ一〇〇％認められるだろ。そうすると海外研修もなんらかのリスクを背負う可能性がある。
城　リスクですか。
美濃部　メンバーは選抜されるそうだ。
上崎　初海外、行けると思ったのに……。
美濃部　なにも支援隊で行かなくても、貯めた金で海外行けばいいだろう。お前は与えられたものでわりと自由に暮らしていけるんだから。羨ましいぐらいだよ。

美濃部、お尻に何かが触れる感触を覚え飛び上がる。

美濃部　わー！
上崎　なんですか！

美濃部　何か触った。俺の尻に。ひゃっ。太ももにも。ネズミ？！
上崎　俺、下半身感じないからわかんないんですよ。
美濃部　蛇か！　助けてくれ！　榎木、スプレー返してくれ！

榎木、眠っている。

城　気持ちわるいですよね。
美濃部　ぞっとする！
城　こういうことなんですよね。
上崎　……城さん？
城　（上崎のマジックハンドを手にもっている）やってるほうは悪気なくやってるんだけど、やられたほうはずっと気持ち悪い感触が残るんですよね。
美濃部　変ないたずら、やめてくれよ！
城　結局、私にしたこと、自覚ないんですか、どうなんですか？
美濃部　……いつ？　何？
城　全然覚えてないんですね。
美濃部　そんな、俺が？
城　はい。
美濃部　ええー、だって、いやだと思ったんなら、その場で言ってもらわないとわからないよ。
城　同志のような近い存在の人だと、すごくその場で拒否しづらい。今回、それがわかりました。
美濃部　上崎、誤解だ。……たぶん、匍匐で擦りむいた時に傷を見てあげたり、腕立て伏せでへばっていたときにだっこしてあげたり、そういう些細なことを誤解したんだろう。
城　いいえ、その他飲み会で胸を揉んできたり、二の腕を揉んできたり、誰もいないところで後ろから抱きついたりしました。
美濃部　それは、遊びの、戯れの範疇でしょう。
城　あなたが本当にそう思っているのなら、私が今から触るように、私に触り返してみてください。

城、美濃部に掴みかかる。

美濃部　榎木、助けてくれ、穴を交代してくれ！
城　榎木君はとっくに寝てます。立ったまま寝られる人なんですから。
美濃部　城さん、何が望みなんだ！
城　上崎君を海外メンバーに入れるよう、松岡さんにお願いしに行きましょう。うちの班の総意だって。もう一つ、私を除染のメンバーから外してください。
美濃部　ええ？　今更なんで？　何回もやってきたじゃないか。
城　ほんとは嫌なんです。何回行っても、次行った時に線量は元に戻ってたりするし、放

射能を無駄に吸ってる気がして耐えられないんです。
美濃部　そんな、ワガママ言わないでよ。みんなやってんだから。それに女性は最初にアンケートが取られただろ、行ってもいいか、行きたくないか、って。
城　だって、行きたくないなんて書いたら、居場所なくなりそうな気がして。
美濃部　だったら今更言うなよ。
城　美濃部さんだって言ってたじゃないですか。除染の後、政府は原発の二〇キロ圏内に住んでた人たちを戻そうとしてて、戻ろうと戻るまいと、補助金を打ち切る予定だって。それ早く進めたいから私たちの派遣を繰り返すんでしょう。
美濃部　俺だってやりたくてやってるんじゃない。あと二年早く生まれてたら支援隊に入らなくて済んだのに、と何回思ったか……。
上崎　まあまあまあ……。
美濃部　俺をそんなふうにいうんなら言わせてもらうけど、その、君にまつわる性的な噂のほうが問題なんじゃないか。
城　なんですか？
美濃部　一部の男性隊員と、援助交際もどきをしてるってことだよ。
城　……ボランティアならいいんですか？
美濃部　そうじゃない！
城　それ、責められることですか。どっちかいうと人助けのつもりです。
美濃部　……。
城　男女雇用機会均等で女性の隊員も入ってますけど、大半は男です。出会いも限られてる。恋人にも会えなくて、たまってくるのは当然です。セクハラの被害にあった女の子の話、結構聞いています。
美濃部　だからって、君、それおかしいよ。
城　私が、そういう活動しているから、美濃部さんはちょっとぐらい、いいと思ったんでしょうか？
美濃部　それは関係ない。
城　ならよかったです。
美濃部　……どうして上崎を海外に連れて行きたいんだ。危ないだけだろう。
城　それは、上崎君が行きたがっているからです。
美濃部　俺たちがどうにかできることじゃないよ。
城　私たち、言われるがままに訓練して、いろんな作業に行かされて、都合の悪い時だけ行かなくていいとか、ちょっとおかしくないですか？
美濃部　給料もらってるんだから、仕事ってそういうものでしょ。城　でも、抽選で選ばれたんですよ、私たち？
美濃部　そうだよ、人のやりたくない仕事をやるために選ばれたんだ。俺たちはそういう人員なんだよ。あと一年はね。
城　あなたが私の要求に答えてくれないなら、いいです、あなたのセクハラに対する解釈もふくめ、松岡さんに伝えます。
美濃部　そりゃないでしょ！
城　私に言わせると、弱い者ほど武器を持つべきなんです。自分だけの。ねえ、上崎君、

そう思わない？
上崎　……城さんは強いよ。

松岡が出てくる。

松岡　状況終了！　撤収、穴埋め！
城　（美濃部に）お願いします。
榎木　（起き出して）あー、よく寝た。

溶暗。

※　シーン４・ショウガイ者ボランティア　※

若槻が話している。

若槻　しえんたいにショーくんが行ってからいちねんたったころ、シューダンテキジエーケンのコーシができるようになりました。ぼくにはなにができるようになったのかわかりませんでしたが、日本じゅうがにぎやかになりました。しえんたいは、ますますかつやくしました。ほうしゃのうじょせん、ぼんおどりのけいび、フジロック、雪まつり、沖縄かいようはく、たくさん、しごとしました。黒岩さんは、しえんたいを、ブラックきぎょうみたいだ、といいました。わけのわからないちゅうせいを毎朝ちかわされて、どこへいけ、ここへいけと、急にいわれ、やすいちんぎんではたらかされる。でも、しえんたいはやっぱり人気でした。ショーくんのはたらきに感心して、ショウガイをもった人たちも、人のためになにかやろう、という「ショウガイ者ボランティア」のエヌピーオーができたのです。ぼくは、そこで唐揚げを作るようになりました。ぼくのつくる唐揚げ弁当はヒョウバンになり、ホームレスのひとや、シセツのこどもたち、ケイムショのひとたちにくばられ、よろこばれました。ぼくの「唐揚げ弁当屋コウモリ」はゆうめいになりました。ぼくは、いちばんショーくんにたべてほしくて、それをテレビの人に言ったら、弁当をしえんたいのひとたちにもっていけることになりました。

黒岩が入ってくる。

黒岩　若槻君、早く。今日は大忙しだからね。
若槻　はい！

若槻、黒岩、去る。

場所は支援隊の訓練施設・地下の懲戒室。コンクリートで塗り固められた、薄暗く、黴臭い匂いが充満した、息苦しさを感じさせる空間。
質素な机と椅子だけが一組置かれており、美濃部がそこに座っている。
上崎が車椅子に座っている。

美濃部　何度も言うけど、こんなこと続けていても無意味だ。都合よく理由をつけて、除隊させられる。上層部はお前をホームに返そうと思えばいつでも返せる。時間の問題だ。
上崎　……ええ。
美濃部　返されたくなかったら、あと半年、国内の業務をこなしながらおとなしく過ごす。お前ならわかるはずだろう。
上崎　はい。
美濃部　だったら、なぜわざわざハンストを。
上崎　……これしかできないからです。
美濃部　……。
上崎　役に立たないから海外派遣は行かないで、って言われて、はい、そうですかって、言いたくないだけです。別に、意味とか、ないですから。
美濃部　班としてできることはやったんだ。お前が海外に行くとしたら、引き続き責任を持って介護を続けるという念書も全員出した。
上崎　ありがとうございます。
美濃部　城さんは署名を集めてる。ただ、状況は厳しいよ。
上崎　はい。
美濃部　本当に動けなくなる前に、早くこんな地下牢から脱出しろ。
上崎　何なんですかねえ。自分。
美濃部　食べろ、とにかく。
上崎　今、世界も人も、大きく動いてるんですよね。そんなとき、結局俺は動けずこんなふうに地下にいる。
美濃部　お前は自分で選んで、動いている。それで俺たちも動くはめになる。お前が人を動かしてるんだ。
上崎　……すみません。
美濃部　上崎。
上崎　はい。
美濃部　一緒に除隊しようか？
上崎　除隊ですか……。
美濃部　いっそ、自分から除隊して、世間に訴えるんだ。支援隊はショウガイ者も連れていけないような危険のある地帯に行こうとしているって。そうすれば少しは気も晴れるだろう。
上崎　でも、どうして美濃部さんまで一緒に。
美濃部　俺は除隊したい。
上崎　！？

美濃部　今すぐにでも帰りたい。
上崎　どうしたんですか。
美濃部　妻が離婚を申し出てきた。上崎　ええ？　マジですか。
美濃部　マジじゃなかったらどれほどいいか。
上崎　それ、週末帰って話し合ったほうがいいんじゃないですか？
美濃部　努力しているが話し合いにならない。そんなとき、俺はいまだに城さんの逆セクハラに悩まされている。いつか欲望に負けて本当にセクハラしていまいそうだ！
上崎　お願いだから負けないでください。
美濃部　もう、疲れたよ。元々俺は支援隊なんていう制度に賛成じゃなかったんだ。志願制にすればよかったんだ。そうすれば学費や生活費を稼ぎたい貧乏な若者が喜んで入るだろう。アメリカの軍隊みたいに。
上崎　貧乏な人が国防担わされるって、理不尽な気もしますけど。
美濃部　だからって、これが平等か？　なんで俺が犠牲になるんだ？　俺の二年間を返せと言いたいよ。サクタやヨシノが脱走した気持ち、俺今すごくわかる。
上崎　でも、除隊って、申請したらすぐオッケーってもんじゃないんでしょう。よほどの理由がない限り、認められないんじゃないんですか？
美濃部　身体的な理由をあげれば、お前は認められるだろう。……俺は難しいだろうな。どこまでいっても、お前は特別だ。
上崎　……俺、除隊したいわけじゃないし、支援隊を告発したいわけでもないんです。ただ、海外派遣に行きたいだけなんですよ。

ドアを開けて城が顔を出す。

城　すみません、上崎君にお客さまなんですけど、入れていいですか？
美濃部　客？
城　今日、「ショウガイ者ボランティア」の方たちから、支援隊への弁当差し入れがある日だったんです。それでメンバーの若槻さん、黒岩さんが届けに来てくださったんです。
美濃部　こんな懲戒室に来てもらっちゃ困るよ。

若槻がドアから顔を出す。

若槻　ショー君。
美濃部　あ、お久しぶりです。
若槻　こんにちは。
美濃部　（城に小声で）なんでここまで。一階で待っててもらえばよかっただろ。
城　上崎君に会うのを楽しみにしてらっしゃるみたいだったんで。

若槻、黒岩、入ってくる。

美濃部　あー、これは、ようこそ。
黒岩　お邪魔します。
城　どうしましょう。テレビのクルーも入ってて、上崎君が若槻さんの作った唐揚げを食べるシーン、是非撮りたいって。
美濃部　ええ？　広報部、キャンセルいれてなかったの？
城　広報には伝わってなかったみたいです……。
美濃部　今、ちょっと撮影無理でしょう。俺、上に行って断ってくるから。
城　すみません、お願いします。

美濃部、去る。

若槻　ここ、僕たちのキチみたいだね。
上崎　ああ、似てるな。
黒岩　訓練施設、初めて来た。バリアフリーになってるのね。
上崎　うん。
黒岩　久しぶり。やせた？
上崎　そうかな。
若槻　ショーくん、ぼく、ゆうめいになったんだよ。
上崎　知ってる。
若槻　唐揚げやの名前、コウモリにしたんだよ。
上崎　うん。
若槻　ぼくの唐揚げ、たくさんの人がたべて、おいしいって言ってるよ。
上崎　よかったな。
若槻　ウメコージ味、テリヤキ味もつくったんだ。
上崎　すごいじゃん。
若槻　ぼくもひとだすけできるようになったんだ。
上崎　……ああ。ヒーローだ。
若槻　黒岩さんがジョシュなんだ。
上崎　助手もいるんだな。
若槻　まいにちうでたてふせもしてるよ。
上崎　おお。
若槻　ホームで唐揚げのなべもかったよ。
上崎　（強い口調で）もういいよ！

沈黙。
若槻、テーブルに弁当を広げる。

若槻　ショーくんにもってきたんだよ。
上崎　……。

若槻、箸で上崎の口に唐揚げを持っていこうとするが、
上崎は目をそらしたまま。

黒岩　ねえ、上崎君。一緒にホームに帰ろう。
上崎　……。
黒岩　もういいでしょ。訓練は。私たちには私たちの働く場所があるよ。
上崎　黒岩さんまで、そういうこと言うの？
黒岩　だって、集団的自衛権が正式に認められたのよ。自衛隊や支援隊が、外国へ行ったら狙われる確率がぐっと上がったのよ。
上崎　別に戦争しに行くわけじゃない。学校なんかの公共施設の復旧や整備、交流が目的の研修なんだから、行ったら死ぬみたいな話にしないでよ。
城　自衛隊の国際復興支援のやり方を学ぶっていう研修ですから。軍事訓練やりに行くわけじゃないんです。
黒岩　でも、もしものことがあったらどうするの。確実に逃げ遅れるでしょう。
上崎　いいんだ。
黒岩　あなただけじゃない、あなたを助けようとする人にも迷惑がかかるのよ。
上崎　そうなる前に自爆する。
黒岩　馬鹿なこと言わないでよ、自爆ったって、自分でできないでしょう。
上崎　自爆できる。訓練した。
黒岩　そんな……、連れて行った人が責任負うのよ？
上崎　なんで俺は自分の人生の責任を自分で負えないの？
黒岩　……。
上崎　黒岩さんと大志は楽しく働けるところがある。それでいいでしょ。俺の介助は城さんがやってくれるって言ってる、心配ない。
城　（えと、あの……。）
上崎　俺は戦地で捨て駒になったっていいんだ。そうすりゃ少しは人のためになるだろ。

若槻が上崎の胸ぐらを掴む。

若槻　楽しみにしてたんだ！　たくさんつくったのに、なんだよ！

若槻、上崎を床に転がす。
若槻、上崎をしばらく見ているが、上崎を離し、突然走って部屋を出て行く。

黒岩　若槻君！

黒岩、若槻を追いかけて走って出て行く。
城、転がっている上崎の様子をうかがう。

城　上崎君、大丈夫？
上崎　あいつ、力、あるな……。

城、携帯を取り出し電話をかける。

城　（電話口で）すみません城です、誰か地下の懲戒室に来られますか？　上崎君が車椅子から落ちて、私一人じゃのせられなくて、……はい、お願いします。

城、電話を切る。
上崎、しばらくじっとしたまま宙を見つめている。

上崎　……俺、変かな。
城　変わってるとは思うけど。
上崎　こんなこと言っても信じてもらえないと思うけど、俺でも何か人のためになれたらって思ってるんだ。
城　変じゃないよ、それ。
上崎　あいつにはいいとこ見せたかった。
城　……上崎君は、彼にとってのヒーローなんですか？
上崎　……。
城　唐揚げ、食べてあげたらよかったのに。

城、テーブルの上の唐揚げをつまんで食べる。

城　ん、おいしい。
上崎　城さん、嫌がらせですか。
城　だって、私もお昼まだなんだもん。食べる？
上崎　ハンスト中。

榎木が入ってくる。

榎木　お待たせ。あーあー、落ちちゃった。
城　あ、ありがとう。

榎木と城、上崎を車椅子に戻す。

榎木　（弁当を見て）あ、上崎もとうとう食べた？
上崎　食べてない。
榎木　なんだ、まだか。絶妙な揚げ具合なんだよね。表面カリカリ、中はジューシー。若槻君にあんな才能があったなんてね。

上崎　……。
榎木　俺、お前の無念もわかるよ。海外研修、志願者はお前以外全員行くことになってるしな。かわいそうに。
城　まだ行けないとは決まってないわ。
榎木　ま、そうだけどさ……。最近のヘイトスピーチの奴らの言い分知ってる？
城　障害者の特権を許さない市民の会ってグループでしょ。一年くらい前から、福祉施設とかの周りで、嫌がらせのデモしてるやつ。
榎木　働けない障がい者たちが国の税金でいい暮らししやがって、っていうのが彼らの主な主張。
城　元々、在日外国人を叩いてたヘイトスピーチの対象が広がって、障害持った人たちは汚い言葉で攻撃され、精神不安定になってるらしいよ。
榎木　そいつらが、今、「上崎こそ海外派遣に行かせるべきだ」って主張してるんだよね。
城　なんで？　味方になったの？
榎木　いや、障がい者だけ危険を免れるような特権は許さないぞってことらしい。流れ弾にあたって死んでも行くべきだ、とか。ネットが炎上してるよ。
城　えー、複雑……。
上崎　応援されてるのか……。
榎木　気持ちもわかるけどな。俺だって、お前がバスクリン付の風呂に女の子の介助を受けながらゆったりと入ってるのを知った時には、殺意を覚えたけどね。
城　子供みたいね。
榎木　今の俺はとっくにそんな地点を卒業してる。上崎、銃を握っていると、これで一つの世界を終わらせることも出来る、そういうすごい万能感がみなぎるんだ。
城　射撃の成績だけはいつもいいよね。
榎木　鍛えたんだ。ゲームセンターで。
城　私は嫌だな、殺すのも殺されるのも。
榎木　俺、そういうことは考えない。
城　全然？
榎木　だって殺されそうになったら殺すしかないだろ。いくら専守防衛なんて言っても、真面目に守って犠牲になるのは現場に立つ人間なんだから。
城　うー、そんな現場立ちたくない。
榎木　ところで上の現場が大変そうだよ。若槻さんが勝手に帰っちゃったって、テレビのクルーが騒いでる。
城　美濃部さんが対応してくれてないの？
榎木　途中までいたんだけど、どっか行っちゃった。城　もう！　何してるのよあの人！
上崎君、ちょっと離れるよ。大丈夫？
上崎　大丈夫。行ってきて。
榎木　上崎、前向きになれよ！
上崎　おう。

城、榎木、部屋から出て行く。
上崎は、目を閉じる。
周囲の音を聞いている。
懲戒室のドアが開く。
松岡が顔をのぞかせる。
上崎が目を閉じているのを見て、しばらく様子を窺っているが、そっと部屋に入る。大きな袋を持っている。

上崎　（目を閉じたまま）松岡さんですね。
松岡　……。
上崎　足音でわかります。注意深く地面に足を置いていく、訓練された足取り。暗闇のなかにいるときは、敏感に耳を澄ませていると、微かな音が自分にいろんなことを教えてくれます。
松岡　……。
上崎　だんだん、自分がコウモリになっていくみたいです。
松岡　目を閉じたまま、そのまま待つんだ、俺がいいというまで。命令だ。
上崎　……はい。
松岡　素直だな。
上崎　目を開けるのが怖い。途方もない威圧感があります。
松岡　俺がこれから何をすると思っている。
上崎　わかりません。ただ、目を開けると恐ろしい状況になっている。危険が差し迫っている。そんな気がする。

松岡は袋のなかからヘルメットのようなものを取り出す。
ヘルメットの上部には銃が固定されており、ヘルメットの左端からはマイクロフォンのような突起物が付いている。
松岡は、上崎の後ろに回る。ヘルメット型銃を上崎に被せる。

松岡　重いか。
上崎　それほどは。
松岡　このヘルメットの上部に銃が装着してある。
上崎　銃。
松岡　目を開けていいぞ。

上崎、目を開ける。

松岡　（黒い鉄の突起物を指し）この先にセンサーがついていて、顎を少し動かすだけで微妙な銃の調整ができる。小型のコンピューターを搭載しているから、ゴーグルで照準が合っているか確認できるだろう。このセンサーの先を噛めば、発射だ。
上崎　僕専用ですか？

松岡　お前を海外研修に連れていくには、なんらかの「工夫」が必要だ。
上崎　……行けるんですか？
松岡　議論の際、ネックになったのは「何かあったときに連れて逃げられない」ということだった。それなら、上崎が丸裸でなく、なんらかの自分を守る術を持っていれば話は別だ。俺はシンプルに考えるのが好きだ。
上崎　僕にも銃が撃てれば別だ、と。
松岡　あれだけ海外で活動している自衛官だって人を殺傷していない。ただ、撃てる状態であることが抑止力にもなっている。自分の心持ちも違う。
上崎　いざというとき、これで身を守れ、ということですね。
松岡　俺はイラクで何度も安全装置を抜いた。奇跡的に撃たずに済んだが、撃つ覚悟が必要だった。
上崎　……。
松岡　緊急事態における海外での発砲はいまのところ個々人の判断に任されている。こんなときでもまだ憲法９条は改正されていないから、基本は専守防衛だ。ただ、危ない状態だと感じるなら、俺は撃てと命令する。その責任は取る。
上崎　はい。
松岡　海外研修の行われるのは、今は米国と良好な関係にある地域だ。自衛隊も復興支援で信頼を築きあげている。銃を抜かなければならない可能性は極めて低い。あくまでも、いざというとき、の場合だ。
上崎　はい。
松岡　防衛産業の連中と、研究、開発を続けてきた。スマートフォンだってシルバー用のものも売り出されみんな持ってる。バリアフリーの銃があってもいいだろう。
上崎　どうしてここまでして僕を連れて行こうとしてくれているんですか？
松岡　城が昨日届けに来たよ、お前の海外研修同行を嘆願した署名は３８２通集まっている。いまの支援隊の過半数を超えている。
上崎　そんなに集まったんだ。
松岡　俺は、お前が執拗に求めているものに興味がある。いったいこいつはこれから何を見ようとしているのか。軽い言葉で言えば、好奇心だな。
上崎　……ありがとうございます。
松岡　これからは毎日この装置を使いこなす特訓を行う、いいな。
上崎　はい！　……松岡さん、これ。
松岡　なんだ。
上崎　これ、自分で装着ができなさそうなんですが……。
松岡　それは、介助者にやってもらえ。
上崎　……はい。このこと、他の上層部の人たちは了解してくれたんですか？
松岡　国の方針だ。

溶暗。

※シーン５・海外派遣　※

中東、とある国の砂漠地帯。支援隊の宿営地近く。
岩場の陰に、隠れている美濃部、榎木、城、車椅子の上崎。美濃部はトランシーバー型の無線機を肩にぶらさげている。全員、防弾チョッキにヘルメットを被り、銃を携帯している。上崎が被っているのは、シーン４で出てきたヘルメット型銃がさらに進化したものである。

美濃部　聞こえた？　一班から六班の宿営地の方らしいんだけど。
榎木　いえ。テントで休んでいたので、気づきませんでした。
上崎　微かに聞こえました。ドドーンって。
城　私は女子トイレにいたので、はっきりと音は聞こえました。
美濃部　ロケット弾らしい。おそらくＲＰＧ―７。
城　怪我人、出たんですか。
美濃部　いまのところは誰も傷を負っていない。ただ、緊急体制を取るようにとの指示が出されている。実弾は、込めてるか。
城　はい。
榎木　はい。
上崎　はい。
美濃部　警備要員は指揮所へ、他の隊員たちは決められたシェルターへ避難するようにとのことだ。いいか。慎重に移動するぞ。
榎木　行きましょう。

ピカっと空が光る。と同時に、ドンドンドーンと何発か大きな爆発音が聞こえる。
土煙が舞う。

城　近い！
榎木　迫撃砲ですか？！
上崎　あっちの岩場吹っ飛んでる！
美濃部　（無線機を取って）こちら二四班。宿営地から南西一〇メートル先に迫撃砲確認。
城　早くシェルターへ移動しなくちゃ。
上崎　誰かいる。
美濃部　何？
上崎　たぶん。あっちの、ほら、五〇メートルくらい先の、左斜め前の岩。何か動くの見えた。
榎木　ほんとに？

上崎　発射口が見えた。すぐ、隠れたけど。
榎木　別の班じゃないのか？
上崎　違うと思う。

四人、息をつめて様子をうかがう。

美濃部　暗くて見えねえよ。榎木　気のせいじゃないの？
上崎　逃げたのか？
美濃部　移動しよう、右前方の岩まで走るんだ。上崎は俺が押す。
上崎　ちょっと待ってください。

上崎、少し岩場の横から顔を出して覗いてみる。
ピカっと頭の上が光り、大きな数発の発射音が通り過ぎる。

榎木　……どっかで狙われてる！
美濃部　（無線で）もしもし、こちら二四班、宿営地より五メートル北の岩場で、何者かに狙われている。どうぞ。（返事を聞いている）……。
榎木　この国、今、アメリカと超友好関係でしょう？　誰が俺たちを狙ってくるわけ？
城　反政府軍……？　昔は反米勢力たくさんいたよね？
榎木　今はほぼいないって聞いたよ。米軍が壊滅させたでしょ。
城　反米テロじゃないの！？　日本は米軍の同盟国だから。
上崎　指示は？　なんて？
美濃部　自衛隊に応援を要請したそうだ。
城　よかった！
美濃部　ただ、それが間に合わなければ……。
城　ええ？
美濃部　いざというときには……、撃っていい、と。
城　嫌です！　あと四日で海外研修も終わりってときに！
榎木　安全装置、外しておきますか！？
美濃部　外そう。
城　私、撃ちません！
榎木　城さん、何訓練してきたんだよ、今まで。
美濃部　撃ちたくなければ撃たなくていい。代わりに俺たちが撃つ。
城　……。
美濃部　しばらく、待機だ。
上崎　こんな俺たちでも、兵士に見えるのかなあ。
榎木　相手にしたら、車椅子だろうが女だろうが、兵士は兵士だよ。

辺りは静寂に戻っている。

榎木　生きて日本に帰りたい。
美濃部　おい、悲観的なこと言うなよ。俺、そういうの我慢してるんだから。
上崎　美濃部さん、結局海外研修辞退しなかったですね。
美濃部　辞退したら、学校戻ってから生徒に何言われるかわからないからな。先生逃げたんだ、とかずっと言われ続けるのはごめんだ。
上崎　真面目。
榎木　牛丼食べたい。
上崎　俺は唐揚げ。
美濃部　カレーライス、甘口が好きです。
上崎　何か、鳴き声聞こえない？

美濃部、榎木、城、耳を澄ます。
微かに、シュー、っという鳴き声が聞こえてくる。

榎木　何の鳥？　気味悪いね。美濃部　虫じゃないの。
上崎　コウモリだ。
榎木　気味悪い。
上崎　本物だ……。初めて見た……。
城　安全装置、外しました。実弾、入れてます。
美濃部　城さん……。
城　フェアじゃないですから、私だけ撃たないっていうのは。
美濃部　そんなことといいんだよ。
城　あなたに女として見るのをやめろと散々抗議してきたのに、ここでやはり女だと思われるのは嫌ですから。自分の身は自分で守ります。
美濃部　追い詰めたつもりはなかったんだ。
城　……。
美濃部　ごめん。
城　おでん、食べたいです！！

遠くで銃撃音が何発か聞こえる。

榎木　どこだろう。
上崎　さっきより遠い。
城　どうして支援隊を狙うの？！　人道支援やってただけなのに！
榎木　わかんないよ！
美濃部　（無線を聞いている）自衛隊の車が途中でやられたそうだ。
城　（泣きそうになって）ええ！
美濃部　国連軍も要請しているが、いつになるかわからない。来られるようならシェルターまで来い、と。
榎木　行きましょう！　待ってられない。

城　どこから狙われてるのかわかんないのよ？　うかつに動けないわ。
榎木　ここだっていつ狙われるかわからないだろ？

銃撃音。さきほどのものより近い。

美濃部　……順番で行こう。
榎木　一人ずつ？
美濃部　皆で共倒れするのは避けたい。三番目に出る人が上崎を押していくんだ。
上崎　俺、いいです。
美濃部　いいって。
上崎　ここで応援来るまで待ってます。みんなでシェルターに行ってください。
城　一人で残してくなんてできないわよ、私も残るわ。
上崎　大丈夫。城さんは、闇に隠れて低い姿勢で素早く走ってけば、シェルターまでそんなに時間はかからない。いつも訓練していた通りにやればいい。
城　置いて逃げられないわ。
美濃部　俺が押していこう。
上崎　嫌です。
城　私が一緒に残ります。
上崎　それも嫌だって。
榎木　早くしないと、銃撃始まったら逃げられなくなりますよ！
美濃部　くじで決めよう。三番を引いた人が上崎を押していく。それが最もリスクが少ないだろう。
榎木　一番目が撃たれたら？
美濃部　待機だ。
榎木　ふう、ぞくぞくする。
上崎　美濃部さん、置いてってください。
美濃部　だめだ。
上崎　俺、ここまで来られただけで、すっごく幸せなんです。すっごくみんなに感謝してるんです。
美濃部　……もう終わりみたいなことを言うな！
上崎　嫌だ！　置いて行かれなければ自爆する！
榎木　妙な真似すんじゃねえよ！　こっちまで巻き込むのはやめろ！
美濃部　（紙とペンを出して）もうくじ作っちゃうからな。
上崎　じゃあ、せめてくじに混ぜてください。俺が一番だったら、二番の人が押してく。俺が二番だったら三番の人が押してく。いざというとき盾にしてもらったら、押してる人は助かるかもしれない。俺が四番だったら置いていってください。
榎木　人間の盾になる気？
上崎　無駄死にするよりましだ。
城　みんなで一緒に助けを待ちましょうよ！
榎木　この岩場にさっきみたいなの落とされたら、一貫の終わりでしょ！

美濃部　……よし、1、2、3、4、だ。

美濃部、紙に番号を書き、細かく折りたたんで混ぜる。

美濃部　俺は最後に引く。さあ。

榎木、城、上崎は、美濃部が差し出した手からそれぞれくじを選ぶ。

美濃部　開けるぞ。

榎木、城、上崎は、美濃部は一斉にくじを開ける。

榎木　……大当たりだ。一番。

城　私、四番です。

美濃部　城さん、上崎を押していけるか。

城　やります。

榎木　じゃあ、行くよ。

榎木、腰の小銃を確認し、低い姿勢で岩場を飛び出す。

ピカっと榎木の上空が光る。一瞬止まる榎木。

銃声。

榎木が倒れる。

美濃部　榎木！

美濃部が走って榎木を助けにいこうとする。

上崎　美濃部さん！

美濃部が榎木を起こそうとした瞬間、銃声。美濃部が倒れる。

上崎、岩場から顔を出し、前方を見据える。

上崎、舌で発射装置を口に引き寄せ、一気に三度噛む。

同時に三発の銃声。

溶暗。

※　シーン６・帰還　※

シーン１、２と同じグループホームの地下倉庫。季節は四月の半ば。
シーン１からおよそ二年半経っている。
シーン１、２と同じように雑多な物が置かれている。
上崎は車椅子に座っている。若槻は、ドアにチェーンを巻き、外からドアが開かないようにしている。

若槻　これでダイジョブ。
上崎　ありがと。助かった。もみくちゃにされて死にそうだった。
若槻　だれもいれないよ。
上崎　車椅子もおかしくなってる。重い。
若槻　ここはあんぜんだ。
上崎　あんなに玄関で待ち伏せされてるなんて。こっちは退院したてだっていうのに。
若槻　ショーくんはヒーローだからね。
上崎　……もう、お前の部屋、ないんだって？
若槻　うん、ないよ。アパートかりた。唐揚げでためた。
上崎　お前の唐揚げ力、半端じゃないな。ごんちゃんと、たっくんと一緒に住んでるんだって？
若槻　うん。ヘルパーさんもきてくれてる。
上崎　よかったじゃないか。若槻　でも、ここ、毎日きてるよ。ぼくたちのキチあるから。
上崎　……ごめんな。
若槻　何、ごめんな？
上崎　俺、あのとき唐揚げほんとはめちゃくちゃ食べたかった。
若槻　しってる。コーギでしょ。
上崎　……ごめんな。
若槻　ぼくもごめんな、あるよ。ショーくんのブルベリかれちゃったの。ごめんな。
上崎　いいよ、そんなの。いいよ。お前、えらいよ。ちゃんと自分で作って、人に喜んでもらってるんだから。
若槻　ぼくはバカだから。
上崎　なんだよ、そんなこというなよ。
若槻　ねえ、ショウガイシャを売ってるってどういう意味？
上崎　……誰に言われたの？
若槻　しらないひと。唐揚げ売ってたらいわれた。
上崎　そんなの、気にしなくていい。全然、気にしなくていいから。
若槻　うん、ショーくんが帰ってきたからいいんだ。
上崎　……ただいま。

若槻　おかえり。
上崎　なんか、変な感じ。お前がもう、ここに住んでないなんて。
若槻　いるよ。
上崎　勝手に寝泊りして怒られないの？
若槻　おこられるよ。ショチョさんに見つかったよ。
上崎　追い出されなかったの？
若槻　おいだされた。また来た。
上崎　……所長が根負けしたのか。
若槻　黒岩さん、会ったね。
上崎　うん。見舞いにも来てくれた。いま、上で変な奴らが入ってこないよう、見張ってくれてる。
若槻　ショーくんはファンタジスタだ。
上崎　……俺が本当にファンタジスタだったのは、中学のとき。サッカー部で、ボール蹴ってたとき。あの時だけ。……俺、ワールドカップ行ってたわけじゃないんだぜ。
若槻　戦争行ってた。
上崎　……。
若槻　ぼくはキチをまもるんだ。

ドアを叩く音が聞こえる。
若槻、びくっとして銃を構える。

黒岩の声　上崎君、若槻君、支援隊の方々が来てくださってるの。いい？
美濃部の声　上崎、開けてくれるか。
城の声　お見舞いにきたのよ。退院したって聞いたから。
上崎　大志、美濃部さんと城さんだ。仲間だよ。開けられる？
若槻　みのべさん、ジョーさん、マル。

若槻、ドアのチェーンを外す。
美濃部、城、黒岩が入ってくる。

城　こんにちは。
若槻　こんにちは。

美濃部は、若槻の持っている銃をみて後ずさる。

上崎　大志、銃どっかにやって。
若槻　うん。

若槻、銃を置く。

上崎　玩具だから。
美濃部　わかってるんだけど、だめなんだ。目がチカチカして、身体が震えてくる。
若槻　ごめんなさい。
美濃部　若槻君が悪いんじゃないよ。（周りを眺めて）祝賀会の日以来だな。
黒岩　一年半ぶりですね。お二人とも、私服だと雰囲気変わりますね。
城　もう、支援隊は三月で卒業しましたから。
黒岩　なんか、いいですね。さっぱりした感じ。
美濃部　晴れて自由の身になりました。
城　（若槻に）唐揚げ、とっても美味しかったです。
若槻　はい、また来てください。
上崎　何、城さん、大志のお店、行ってるの？
城　通ってるハローワークの近くで、屋台販売してたの。
若槻　サービスしたよ。
黒岩　私、上に戻るね。
上崎　お願い。

黒岩、部屋を出て行く。
若槻、チェーンを再び巻く。

城　結局、上崎君が一番長くかかったね、病院。
上崎　四週間とちょっと。撃たれたの脚だったから、あんまり生活変わんない。
美濃部　俺は一週間ちょっとだ。手術もすぐ済んだ。今はもう身体的には不自由なく暮らせてる。
上崎　九州に帰ったんだと思ってた。
美濃部　帰ったばい。ばってん、用事があって今だけ滞在しとっと。ちょうどお前が退院したから見舞いに行くって城さんからメールあってな。
城　……すごいね、上の報道陣。
美濃部　一切拒否してるの？
上崎　うん。
若槻　テレビバツ。
美濃部　どうしてお前が撃ったこと、報道されてるの。
城　……私、言ってないよ。でもあの後上崎君が撃たれて倒れて、助けに来た国連軍の兵士が、上崎君の銃に触ってた。それでわかったんだと思う。
上崎　なんか今日、防衛大臣が見舞いに来るっていうんだ。……絶対会わない。
若槻　ぼうえいだいじん、バツ。
上崎　いつかわからないけど、アベ首相も見舞いに来たいって言ってるらしい。
城　首相まで来るの？
美濃部　日本の首相、すぐ変わるって海外で噂されてるけど、あの人かなりしぶといね。
上崎　アベさん、バツ。若槻　アベさん、バツ。
美濃部　これは会ったら、記者会見開けって迫られるな。いまや、上崎は初めて海外で銃

を撃った「英雄」になってるんだから。
城　私たちを助けた「英雄」ね。
若槻　エイユー？

一同、なんとなく沈黙している。

上崎　俺はたまたま、くじで三番を引いて、榎木と美濃部さんが撃たれたから反射的に撃った。撃っちゃったんだよ。
若槻　すごいね。
上崎　すごくない！
城　なんだか私、一人だけ無傷で、後ろめたい。
美濃部　みんなくじで決めたことだからな。俺だって後ろめたいよ。榎木より先に自分が行くべきだったかといまだに考えたりする。
上崎　俺、なに言えばいいわけ？　撃ちました。当たったと思うんだけど、その後自分も撃たれたからよくわかりません。って言うの？
城　国連軍が着いたとき、現場に射撃手はいなかったわ。血痕だけが残ってた。
上崎　僕は犯罪者です、すみませんって言うべき？
美濃部　逆だよ。お前は、「ぼくは英雄です」って言うのを期待されてるんだ。

ドアの向こうから黒岩の声が聞こえる。

黒岩の声　ねえ、上崎君、若槻君。お客様がいらっしゃってます。
上崎・城・美濃部　……。
黒岩の声　松岡さん。
上崎・城・美濃部　……。
黒岩の声　開けてくれる？
若槻　マツオカさん、バツ？
美濃部　松岡さん……。
城　どうする？
黒岩の声　お話をしたいって、おっしゃってるの。
上崎　……開けて。

若槻がチェーンを外す。
松岡、黒岩が入ってくる。若槻は再びチェーンを掛ける。

松岡　お邪魔します。
美濃部　お久しぶりです。
城　お久しぶりです。
松岡　（美濃部、城に）卒隊式以来だな。元気だったか。
美濃部　ええ、もう普通の教師に戻っています。

若槻　おひさしぶりです。
松岡　若槻さん、その節は唐揚げ弁当の差し入れ、ありがとうございました。
若槻　どういたしまして。
松岡　懐かしいですね。私が初めてここに来たのが、もう二年以上前のことになる。
黒岩　ええ。あの時は上崎君が支援隊に行くなんて、思いもしませんでした。
松岡　私も思いませんでしたよ。黒岩　フフ。すみません、私、上の対応に行かなければならないので、失礼します。

黒岩、礼をして出て行く。

松岡　上崎、卒隊式に出られなかったのは、残念だったな。卒隊証書を届けにきた。
上崎　松岡さん、そのためにわざわざ来ていただいたんですか。
松岡　面会拒否されたままお別れじゃ、忍びないからな。
上崎　すみません、会いたくなかったんです。
松岡　よかった、元気な姿が見られて。
上崎　……。
松岡　俺はあのとき、司令部で指示を出すことに追われていた。お前らは自分たちで、自分たちの身を守った。誇りに思うよ。
美濃部　……。
城　……。
上崎　僕に、銃を渡してよかったと思いますか？
松岡　ああ。
上崎　自衛官の人たちが、ぎりぎりのところで使わなかった銃を、僕が撃ってしまった。
松岡　正当防衛だ。お前は堂々と、発砲したと言っていい。なにもこそこそする必要はない。今、隠れていると、ずっと隠れていなければならなくなる。
上崎　……そうでしょうか。
松岡　今日、防衛大臣がここに来るのは聞いているだろう。
上崎　ええ。
松岡　一緒に記者会見を組むことを、要請されるだろう。俺はいい機会だと思う。ここで国民の前ではっきりと会見すれば、世間はお前の勇気を称えてくれる。お前のもやもやした気持ちもすっきりする。
上崎　……。
松岡　アベ首相も、いずれ日程を調整してくることになっている。
上崎　聞きましたけど、首相までなんで？
松岡　ここだけの話だが、国民栄誉賞まで検討されている。
城　ええ！
上崎　俺に？
若槻　アベさん、マル？
美濃部　うーん。
松岡　上崎が公に自分で発表する意思があれば、決まるだろう。

上崎　……。
松岡　政府はお前の働きを評価している。将来的に最も能力を活かせる道に進めるよう、全力でサポートする。障害を持っていても、自分らしく働けるような場所が欲しかったんじゃないのか。
上崎　……。
松岡　俺ももうすぐ自衛隊は定年だが、その後も支援隊の顧問として、お前の力になっていく。約束する。
上崎　……ありがとうございます。……考えさせてください。

ドアを叩く音がする。

榎木の声　みんな、ここでしょ。黒岩さんに聞いたよ。

榎木、ドアを少し開けるが、チェーンのためほんの少ししか開かない。

榎木の声　なに？　立てこもり？
城　榎木君だ。若槻君、いいかな。
若槻　はい。えのきくん、マル。

若槻、チェーンを外す。
榎木が入ってくる。右肩から右腕にかけて、ぐるぐるに包帯を巻いている。

榎木　松岡さん！
松岡　榎木……、お前、退院できたか。
榎木　はっ。

榎木、癖で敬礼しようとするが、右手を動かせず、姿勢のみで一〇度の敬礼をする。

松岡　榎木……。

松岡は、榎木を抱きしめ、肩を叩く。

松岡　随分良くなったみたいだな。
榎木　お見舞い、ありがとうございました。自分は病院でゲームもできず、やることがなくてしょぼんとしておりました。
若槻　エノキくん、ぼく、ニンテンドーかったよ。唐揚げでためた。
榎木　あ、買ったの？　俺が勧めてたやつ。
若槻　はい。サッカーしよう。
榎木　俺、できないんだよな、もう。

上崎　右腕、動かないの？
榎木　うーん。神経がやられちゃってもうダメみたいなんだ。
上崎　……。
榎木　あ、でも、俺の怪我の具合は、秘密保護法規定に引っかかるから、内緒ね。
美濃部　え？
上崎　どういうこと？
榎木　さあ。支援隊は公務員に準ずる立場だから、国家機密を漏らすと、罰せられるんだって。
城　榎木君の怪我、国家機密なの？
松岡　榎木が負傷したことはもう公表されている。ただ、その怪我の具合に関しては、国民に動揺を招くことが懸念されるので、いまのところ伏せておくというのが政府の方針だ。
若槻　エノキくん、ショウガイシャなの？
榎木　手帳はもらえるって。

沈黙。

城　（泣きそうになって）榎木君。
榎木　……何、そんな同情とかされると、気まずいんだけど。
美濃部　榎木、ごめん。
榎木　そんな……。
上崎　榎木……。
榎木　お前までかよ、上崎。だって、くじでしょ。しょうがないだろ？　みんなそれぞれ大変でしょ？　美濃部さんだって奥さん出て行っちゃったし。
松岡　そうなのか？
美濃部　……夜中、叫んでるみたいなんですよ。誰かが俺を狙ってるって、冷や汗かいて起きるんです。妻は耐え切れずに息子を連れて出て行きました。
松岡　そうだったのか……。
美濃部　僕は自分と同じような二年間を、他の人も味わうべきだとは到底思いません。
上崎　……そういえば、僕が銃を持つことも秘密保護法規定で、機密扱いだったと思うんですが、いつのまに公表されたんですか。
松岡　国連軍がお前を助けたときにヘルメット型銃を珍しがって写真を撮りまくった。機密扱いもなにもなくなってしまった。
上崎　……どうせばれたから、発砲したことも既成事実として華々しく公表して、海外での武力行使をなし崩しに容認するのに利用する、そういうことですか。
松岡　いいか、お前は撃った。仲間の支援隊員を守るために、自分を守るために撃った。
上崎　僕、わからないんです。撃たなければ、僕は撃たれなかったかもしれない。……僕は人を撃った。
松岡　撃った結果、みんな助かったんだ。そのことだけ考えればいい。
上崎　……。

城　なんで私たち、狙われたんでしょうか？　やっぱり米軍の同盟国の兵士とみなされたからなんでしょうか？
松岡　……反米テロ組織のやったことだと言われている。
美濃部　米軍の同盟国として、集団的自衛権を行使する集団と見られ、襲われた。このことに関して、国民の避難の声が高まっているのを政府は抑えたい。上崎の発砲という大ニュースの裏でうやむやにしてしまおうとしているんじゃないんですか？
榎木　それで俺の怪我の具合が機密扱いなの？
松岡　組織の維持のためには、迂闊に公表できない事柄もある。……国民は軍事に過敏に反応する、そのくせ、軍事を担っている自衛隊が海外で何をしているかは、ほとんど無関心だ。政治家は国際関係上の立場を守るために、行けと命令し、後は現場任せだ。俺は、生身の人間が軍事を担っていることをもっと多くの人に感じてほしいと思っている。支援隊は、市民と軍事をつなげる画期的な試みだった。この制度を今、つぶしたくない。
城　でも、犠牲が出ているんです。これに目をつぶるんですか。
松岡　目をつぶるわけじゃない。榎木だって、俺が責任を持って保障を受けられるようにする。
上崎　俺、支援隊をつぶしたり、誰かを訴えたりしたいわけじゃない。自分が、どんな顔して記者会見とかしたらいいのか、わからないだけです。
松岡　お前は、ただ普通にいればいい。防衛大臣が相談に乗ってくれる。
上崎　もし、僕が発砲せずに死んでいたら、それでも英雄だったんでしょうか。
松岡　……。
上崎　障がい者の俺が、発砲して、生き残った、それを称えられているんでしょうか。
松岡　仲間を守ろうとした、その勇気を称えられている。上崎　それだったら、美濃部さんだって、榎木だって、城さんだって守ろうとしてました。
松岡　……。
上崎　生き延びた、それだけで英雄なら、榎木、美濃部さん、城さん、他の支援隊のメンバー、もっと言えばイラクに派遣されていた自衛官の人たち、みんな英雄です。
松岡　ああ、英雄だ。
上崎　僕だけ、何かをもらったりするのは、やっぱりおかしい気がする。防衛大臣とは、会えません。
松岡　……お前は、おかしな奴だな。ほんとに。
上崎　すみません。
松岡　正直、お前みたいなやつが支援隊にいることは、面倒で迷惑だった。
上崎　わかっています。
松岡　だが、お前をどうやって移動させるか、どういう活動ならできるか、だんだん考えるのが習慣になってきた。やりがいはあったよ。
上崎　……。
松岡　もうすぐ防衛大臣が来る頃だ。上崎は会わない、と伝えないとな。（若槻に）開けてもらえるかな？
若槻　はい。

若槻、チェーンを外し、ドアを開ける。

美濃部　松岡さん！　お世話になりました！

美濃部、礼する。城、榎木、上崎、若槻も礼する。
松岡も、礼を返し、去る。

榎木　俺の３ＤＳのソフトほしいのあったらあげるよ。
若槻　ほんと！？
榎木　今度、うちにみにくる？
若槻　うん、行く。
榎木　どうせ売ろうと思ってたから。
若槻　エノキくん、好き。
美濃部　……俺、お前の怪我が秘密保護規定の対象って、実はまだ納得いかないんだけど。
榎木　ま、医療費と生活費保障してくれるなら、いっかって感じです。
美濃部　お前の医療費が保障されるなら、俺のカウンセリング代だって保障されていいんじゃないか。俺のＰＴＳＤは海外派遣が原因なんだから。
若槻　みのべさん、ビョーキですか。
美濃部　……暗いとこがこわくなったんですよ。
若槻　ぼくも、くらいとこ、こわいよ。いまは、いや。
上崎　コウモリじゃなくなっちゃったのか。
若槻　……コウモリじゃなくなっちゃったですか。
美濃部　コウモリは思い出すから嫌だな……。
上崎　お前も色々苦労したんだな。
若槻　わかんない。
美濃部　……俺は、次、緑紙がきたら、拒否するぞ。拒否しなかった俺が悪かったんだ。
上崎　年齢的に、もう来ないでしょ。
榎木　懲役五年は絶対、嫌。
美濃部　でも考えてみろよ。別の方向から見れば、俺たちだって加害者になるんだ。言われたから参加しました、だけじゃ済まないよ。
城　知ってる？　生活保護受けてる家庭の若者は、支援隊参加を義務付けるべきだって意見も、国会で出てるんだって。
上崎　全然民主主義じゃない……。
城　私も拒否します、緑紙。……次海外に行くとしたら、ボランティアで行きたいな。
若槻　ジョーさんもショウガイ者ボランティア、やりますか。
城　いいな、やろうかな。
美濃部　ボランティアよりまず、職探しでしょ。人助け考えるのもいいけど、自分のことも大切にしないと。

城　ありがとうございます。でも、私、自分のこと、ちゃんとできなくても、人のためになにかしようとしたって、そういう自由があったっていいんじゃないかって思うんですよ。

ドアが叩かれる。

黒岩の声　上崎君、ちょっといい？

若槻　黒岩さん、マル。

若槻、チェーンを外しドアを開ける。
黒岩、入ってくる。

黒岩　総理大臣来たって。

上崎　そう。

美濃部　え、総理大臣！？

榎木　マジ！？

城　いきなり！？

黒岩　どうしよう。

上崎　会わない。

若槻　バツ！

榎木　俺、見に行こうかな。

美濃部　俺も。俺たちにどういう対応するのか、ちょっと興味ある。

城　完全に無視されたらどうします？

美濃部　そしたら、自己紹介しようか。「海外派遣で負傷しました支援隊員です」って。

城　松岡さん、どんな対応するんでしょうか。

榎木　見たい、見たい。

美濃部　上崎、俺たち、上に行ってくるぞ。

上崎　行ってらっしゃい。

美濃部、榎木、城、部屋を出て行く。

黒岩　やれやれ、報道陣や野次馬がすごいわよ。上崎君はまだここにいたほうがいいわ。

上崎　ありがとう。

若槻、玩具の銃をいじっている。

上崎　とうとうやめなかったね、仕事。

黒岩　いろいろバタバタしてたのよ。入居者が入れ替わったり、他の職員がやめたり…

…、というのは言い訳で、上崎君帰ってくるまでは、いようと思ったの。

上崎　え、まだやめる気でいるの？

黒岩　うん。
若槻　ぼくね、黒岩さんにいっぱいジョシュしてもらったよ。
黒岩　若槻君……。
若槻　だから、やめていいよ。
黒岩　……。
若槻　ぼく、いいよ。
黒岩　そうね、ショーくんが帰ってきたもんね。
若槻　ショーくん、黒岩さんデートいいよ。
上崎　……。
若槻　黒岩さん、ショーくんデートいいよ。
黒岩　（上崎に）ヘルパーの仕事ってさ、人の手足になるみたいなところあるでしょ。でもやっぱりそこにも意思があるんだよね。
上崎　そりゃそうでしょ。人間だし。
黒岩　そう、あなたといると、その意思が暴走しちゃうわけ。ここはとっても居心地がいい。けど、これからは、職員じゃなく人間として、あなたと出会いたいの。
上崎　……ずっと前から、もう出会ってるし。
黒岩　そう？
上崎　俺は、最初からそう思ってた。
黒岩　（微笑んで）よかった。
若槻　ぼくここではたらくんだ。
黒岩　ここで？　わたしの代わり？
若槻　唐揚げもする。なんでもあげる。かぼちゃも、ピーマンも。
上崎　てんぷらもやってみるってことか。
若槻　そうじせんたくもします。ふくもまちがえない。
黒岩　すぐじゃなくても、少しずつ、できるかもしれないね。無理だと思ってたこと、やってきたもんね。
若槻　はい。
上崎　玄関先の桜、あんなにきれいだったんだな。
黒岩　そうよ。今年は遅咲きだから、見られたわね。
上崎　……大志、上に行くの、手伝ってくれる？
若槻　上、あぶないよ。
黒岩　今、まだ人がいっぱいだよ。
上崎　わかってる。でも俺、自分でちゃんと言わなくちゃ。撃ちましたけど、ヒーローじゃありませんって。つぶやくだけじゃだめなんだ。そうだろ、大志。
若槻　ショーくんはヒーローだよ。
上崎　違うんだ。ヒーローじゃないっていうのが、大切なんだ。
若槻　むずかしいね。
上崎　知らないうちに、利用されたくない。一緒に来てくれる？
若槻　一緒なら、いいよ。
黒岩　（車椅子を見ながら）車椅子、まがっちゃったのね。

若槻　ようし。

若槻、上崎を立たせようとする。

上崎　銃はいらないよ。

若槻　わかった。（銃を置く）

若槻、上崎を運ぶため、上崎の腕を自分の首に回し、上崎を立たせる。

黒岩、手を貸す。

上崎　ねえ、俺の足、ちゃんと地面についてる？

黒岩　ついてるよ。しっかり。

上崎　そっか。

黒岩、若槻、上崎を支えている。

溶暗。

（了）